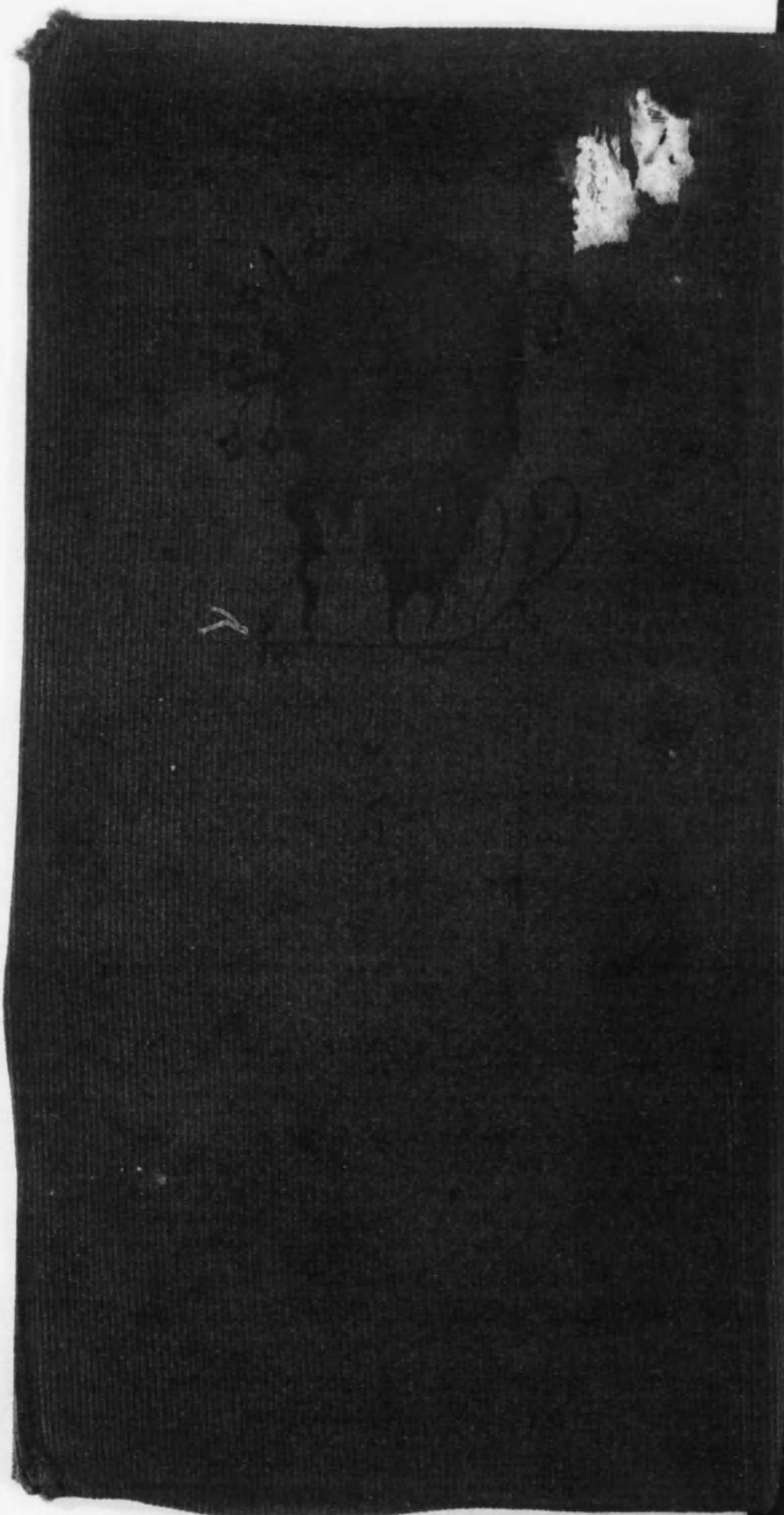


始





#3264  
417



處女  
氣質  
自

由  
結  
婚









# 自由結婚

徳田秋聲  
三島霜川合著

( 1 )

「ちや阿母さん、妾あ何うすれば可いんですの。……妾、真箇に困つて了ふわ、可厭になつて了ふぢやありませんか。」

と然も憤れつたさうに謂つて、簪で頭を掻きながら唇を尖らして、聲に濕を有たせて居るのは、年の頃二十を一つ二つばかり越した……かとも思はれる女であつた、夏——と謂つても卯月の頃。

自由結婚



( 2 )

椽頭には楓の、若葉がきらりと日光に射られて、影は劃然と手洗鉢の水の面に戦いて居た。散残つた八重櫻の色は褪めて、落花に大地の一箇所は白く環取られたやうになつてゐた女は節糸織の袴の上に較古びた縞のお召縮緬の羽織を引掛け赤入花模様様の唐縮緬し縞子の晝夜帯の間に、ふつさりとした淡紅他縮緬の帯上げを見せて、全てが若作り一体が小柄な體格で漆のやうな黒髪は銀杏返しとかいふのに結つてゐた。やゝ紊れかゝつた髪は毛は一ふさばかりはらりと櫻色をした頬に亂れて居た。朱の唇は薄く、屹と結んだ点に無限の怨を有つて、黒目勝の目のうちには何時か曇がかこつて居た阿母さんといふは四十餘りの上品な隠居風、頭髪は切下げ髪とかいふのであつた。何やら縫物の

手を休めて膝に散つた糸屑を拂ひながら、

「何うも憚うも無いぢやありませんか、ね。私の謂ふ通にお仕ならば……斯うなんだね、可いかえ、彼方からお迎にお在有なさるまで待つんだけと……お前其が出来ないと謂つてお在有だし、然もなきや別に好い思案と謂つても無いやうだがね……實に阿母さんも當惑して居ますのさ。」

「だけと阿母さん、能つてお手紙を見て下さいませ。他に好い思案も無いやうぢや、妾あ、妾あま何うしませう。眞箇につまらないのね。ぢや斯のま、破談にして下さいませ……え然うなんですか」と手許に落散つた紅絹の片をみりくと引裂いて、齒切して俯首にな

( 3 )



( 4 )

つて了ふ。母は眼を圓くして……呆氣に取られる。

「お今や、お前まあ何をお爲なんだね。」

お今ははつと我に返つて隠顯に莞爾して、

「だつて……。」

と甘えて見せる其の邪氣の無い舉動に、

「だつても無いものだ。」

と母も眉を擧めて、耐力も無く笑面になる。少時経つてから、

「ちよいと……ちよいとッ。」

突如にお今は齒痒さうに呼掛けて、

「ねえ阿母さん、ねえ——お手紙の様子ちや何んでも今のところでは

( 5 )

「然うさね。」

た。

と處女らしい駄々を捏ねて居る。眼の内には疾や一坏に涙を溜めて居

んな事になつては、妾あ眞箇につまらないわ、眞箇よ。」

と妾の方から行かないとなりや、十年経つても百年経つても駄目で

すわ……不縁になるに定つて居まさ。足掛六年も待つて居て今更そ

よ、とね、新うなんでせう斯う有仰るのでございませう。然うする

と妾の方が大變にお忙しいもんだから、到底此方まで出向く譯に行

かない。あの、そいで、約束通りにしやうと謂ふのなら、妾の方か

ら出向いて與れるやうにつてね然うすりや屹度約束は反古にしま

よ、とね、新うなんでせう斯う有仰るのでございませう。然うする

と妾の方から行かないとなりや、十年経つても百年経つても駄目で

すわ……不縁になるに定つて居まさ。足掛六年も待つて居て今更そ

よ、とね、新うなんでせう斯う有仰るのでございませう。然うする

と妾の方が大變にお忙しいもんだから、到底此方まで出向く譯に行

かない。あの、そいで、約束通りにしやうと謂ふのなら、妾の方か

ら出向いて與れるやうにつてね然うすりや屹度約束は反古にしま

よ、とね、新うなんでせう斯う有仰るのでございませう。然うする

と妾の方から行かないとなりや、十年経つても百年経つても駄目で

すわ……不縁になるに定つて居まさ。足掛六年も待つて居て今更そ

よ、とね、新うなんでせう斯う有仰るのでございませう。然うする

と妾の方が大變にお忙しいもんだから、到底此方まで出向く譯に行

かない。あの、そいで、約束通りにしやうと謂ふのなら、妾の方か

ら出向いて與れるやうにつてね然うすりや屹度約束は反古にしま

よ、とね、新うなんでせう斯う有仰るのでございませう。然うする

と妾の方から行かないとなりや、十年経つても百年経つても駄目で

すわ……不縁になるに定つて居まさ。足掛六年も待つて居て今更そ

よ、とね、新うなんでせう斯う有仰るのでございませう。然うする



( 6 )

と、母も心から當惑して居るらしく、

「お前だつて子供といふのぢやなし、疾く縁についてお與でない、そりや私も心配でね、お前が思つてお在有よか、十倍も二十倍も氣は急ぐのだけれども、遠い箇所へ行くんだから、お前一人ぢや危険だし、と謂つてね、私がついて行くの、誰かをつけて與ると謂つては、面倒だし……面倒ばかりか容易な事ぢやなし……阿母さんも眞箇に思案に餘つて居るのだよ。其ともお前まあ、何んか考へた事があるのなら、隠さずとね、謂つて御覽。」

お今は忸怩しながら、頓に返事を爲得なかつたが良刻して、

「阿母さん……」

と言銳とく呼掛けて屹となる。

「ねえ」

と言惱んで居て、

「此の上に三年も五年も待つて居ちや甚麽事になるか、知りやしませんわ。だから……」

と謂つて母の面を見る。

「何うお爲だ？……思切つて了ふ氣にでもおなりかえし」

と何んとなく冷に問反して、じろりと娘の横面を睨めた——底意ありげに——、お今は頓着なしに、

「何んだつて、まあ——何んだつて思切るものですか……阿母さんで

( 7 )

自由結婚



( 8 )

は無情。

「では？……何う爲るのさ。」

と母の聲は鋭くなる。

「あら！もう慍つてお在有なんだもの……だから妾何んにも謂やしないの。」

「慍つても居ないんだが、ついね、思案に倦むもんだから。」  
と改めて呼掛ける。

「何んだえ。」

「妾斯うしやうかと思ふの、何うしても健三様が来てお與んなさうらけや、妾一人で行かうと思ふの……關まはないわ、一心ですもの、何

が心配なことも怖いこともあるものですか。」  
と謂つて氣遣はしさうに母の氣色を覗つた。有紫に胸が跳つたのか、  
面の色は、ほうと紅を潮して居た。母は默然として居た。

( 二 )

( 9 )

自由結婚

母なるお絹は、思つたより、驚いた氣色、惘れた舉止も見えなかつた  
が唯一人の一粒種の愛兒をば手離して、一人旅に上せん事の憂慮はし  
さに、且は浮世知らぬ娘が大膽なる決心に心躍りて、我を忘れて少時  
は恍然と娘の面を覗めて居た。

「お前の然う思窮めてお在有たのも道理だけども、まあ考へても御覽



な、健三様こそ知つてお在りだけども、お前の方様では、磯川のお  
 兩親なり御兄妹はだよ、お前といふものに一度だつてお逢ひなすつ  
 た事がないのだから、わざ／＼出掛けて行つて、何様間違が出来  
 かりやしません。悪くすると御兩親や何かの方に故障があつてさ  
 お前を嫁にされないといふと謂出されて御覽、可い恥晒しぢやないか。其  
 段になると馬鹿を見るのはお前ばかりだよ、妾あ、其が口惜しいわ  
 萬一また、お前の身に難癖がついて御覽、妾あ阿父さんの位牌に濟  
 みません。はい。だから輕擧な事は爲ないで、お前能つく考へてね  
 親の無い子だ！、あれ見ろ！と世間の後指をさゝれないやうに爲て  
 お與れ、ね後生だから。」

「ですけどね、阿母さん、妾あ然う思つて居ますの、他の人は何うだ  
 つて關やしませんわ、ねえ然うぢやありませんか健三様さへ六年前  
 のお今だと思つて居て下さりや、そいで可いことよ。加之お手紙の様  
 子で見ると、妾あ大丈夫だと思ひますの。」  
 どお今の言には力が籠つて居る。

「然うかえ。」

と母は危んで居る。

「然うですとも。」

と、お今は斷乎と謂放つて、其の面には疾や動かすべからざる決心の  
 色が見られた母は娘の雄々しさに心動きて、頃刻言もなかつたが、



( 12 )

「呀！、思へばいじらしの娘！、と漫に我と我に繰返される愚痴、夫となるべき健三にもし信あらば、花は漸く盛の色の褪せぬ間に、迎にきて來べき筈であるのに、そも什麼なる思慮が其處には潜むのであらう？、何時も何時も文の音信に睦まじさは見すれど、何うやら一寸脱れの申譯らしくもある誠の無い仕向け。無垢の娘に斯ばかり知らぬ面の憎さ。娘が思ふ千に一つなと思つて與れさうなもの、娘が誠心の曉の夢になりと健三に通じたらば！、と愚に返つた親心の、娘の焦れて居る程にも無い健三の薄情が、怨めしくて怨めしくてならぬのであるが、親は思へど子は更に……目前お今が親をも家をも振り捨て、健三の許へ行かんといふに、久しく娘よ母よと呼交して、如何なる事あら

んも、膝下をば放すまじと夢みし娘の、疾や此の家を見捨て去るやうに覺えて、老の胸のたい涙に塞がるのであつた。

「お前は然う謂つてお在有だけど、女の身で一人旅なんてものは出来るものちやありません……能く魔が魅したりなどしてね。」

「えッ魔が？……。」

「お今は何か知らず怦然とする。」

「然うさ、魔さ——。」

と母の言は不思議に落ちて居た。

「魔とは阿母さん……什麼物なの……妾知らないわ。」

「魔とはね。」

( 13 )



と母は有繫に返事に窮つたが、早速に轉じ變へて

「人の弱味へつけ入つて種々に酷い目に逢はせるものさ。そいでお前のやうな世間不見はね、其の魔に攫まると知らず知らず深味へはまつて、とんだ難義をしますのさ。」

「へい、其様物が居ますの、當節でも。」

と、二十は越したといふものゝ、お今は實に浮世の塵に染まぬ深山の奥の奥の山櫻……と謂つたやうなものであつた。

「そりや澤山居ますね、拘摸だとかぼん引だとか、女仕入だとか。」

「其様物が何が怖いものですか。額が人でせう。」

「其の人がさ、お前怖いのだよ。其にまあ、臆面の無いところを謂ふと

斯うさ。第一怖いのは健三さんさ。」

「えッ。」

「どいふのは可いかえ、何んだつてお前六年以前のお知己ぢやないか其の時こそ出世したら。貰つてお嫁にするなんて謂つて在有つしつたが、當世の方だもの、今ぢや何うお心が變つて居るか知れたものぢやないよ。いゝえさ、餘り邪推り過ぎるやうだけれども那の時分はお前も十五か六で、お庭の那の柿の木が、まだ是許しきやなかつた時だもの、お伶俐な……妾あ其のお伶俐過ぎたのが嫌だつたけどもお伶俐でね、優しいやうで、お前なんぞが好きさうな方だつたけども今ぢや悉皆大きくお成んなすつて、お前の嫌な髭まで生して、甚麼



( 16 )

に怖い方になつてゐるか知れやしない。お前往昔の健三さんだと思つて行くどね大間違だよ——甚麼間遠出来るか知れやしない。」

と、其の心を翻へさんどでは無いが、お絹は意にも無い事まで駢べて娘の意氣組を挫がうとする。

「可厭な阿母さん、誰だつて大きくなりや罷も生えませうぢやありませんか、何も那様に悪く有仰らないでもの事ですね。其に設六年経たうが十年経たうが、心のお變んなさるやうな健三さんぢやありません」

「其はまあ、然うだらうけども。」

と、極悪さうに血汐さつと上らしたお今の横面を眺めて、

「何うか然うなりや實に結構だがね、お前眞箇に輕擧な事を爲るんぢやありませんよ。能つく考へてね魔が魅さないやうにね、可いかえま、ま、其よかお前斯の襷を絆けてお興れな。」

と、謂へど、お今は放心とした面で、庭の若葉を眺めて餘念が無い。かとも思はるゝ眼の裡には涙が一杯に溢れて……頬に傳つて……はら／＼と縫物の上に亂れ落ちた。

( 三 )

( 17 )

磯川の一家が尙だ田舎に居た頃であつた。健三といふのは十五六の少年で、お今は振分髪ふりわけがみの幼い女であつた。故あつて磯川の一家が東京に

自由結婚



引移つて、今の如に盛大になつて、幾箇所かに商店を有つて、手廣く商業を営むやうになつてからは、健三の身體は尪弱く、動もすれば學業に就くべき望さへ断ゆるに、東京の塵埃に塗れて、愈々健康を損ねん事を恐れて、お今等が住へる町に世帯を持つ健三が乳母の家に、養育費若干金を支給して、二十になるまでの期限で預け置かるゝ事となつた。親よりも親しみ厚かりし乳母は、悦んで健三を家に迎へて、萬事に意を用ゐて懇に介抱して、事もなく月日を送つて居たのであるが、漸々と期限に近づいて來ると、健三は思つたより健康な體になつて、來ん年は久しく相見ざる親双兄弟の待るる東京に行かんと樂しみ居たりし折から、圖らずお今と相思ふわりなき間とはなつた。

若き男と若き女との、譬へば野邊の下萌にも似たらん戀は、當初、嚴格なる乳母が見張の眼にも入らず、氣遣深きお今が母の聰き耳にも入らず、最と忍びやかに、最と微けく、迭の胸にうち秘られてあつたのである。が、事あれかし鋭の眼に夕の團扇の語草發見さんと勇めつゝある世間の眼の晦ましやうは無くて、二人の間何時かあて推量の世間の口に登つて、或は町盡頭を流るゝ小川の堤傳に、柳の下に二人が物思はしげに歩むを見たりと謂ふ者あり、或は健三が乳母の留守に、お今を招きて樂しげなる笑聲の、小窓より洩來たと謂囁す者もあり、又は淋しき夕間暮に、健三がお今の間近を往きつ戻りつ、去り兼ねる様にてイめるを認めたりと語る者さへあつた。



斯くて性來快活なる健三は、世間の口舌廻しとばかり、柔しき乳母とも談合の上、お今が家に入出して、母なるお絹と親しみて、争で行末かけて夫婦の盟を許し玉はずやと、思切つた面色にて説出した事もあり、其の時はお絹はたゞ微笑て、お今の身に取りては、誠に望難き縁にはあれど、御身にとて父母在すものなれば、容易くは許し玉ふ事あるまじと、軽く流せば、健三は躍超となりて、若し父母許さずば我は家をも財産をも打捨て、再此の地へ追れ来て、乳母が家に果敢なき其の日を送らんまでのこととし然れど願うて許さるゝ事はよもあらじとて、其の眞顔なるが、可笑しかりしと、後にお絹は笑つて居た。其の頃よりして、二人が戀に暖さの加はつて、愈々希望の光を放ちて、始

後指さした世間の、おやつかい屋も、戀ては健三の眞心を感じて、果は近所の美しき評判とはなつた。が、健三は一日、お今を近き森蔭へ誘ひ行きて、語りけるは、御身だに志堅き戀ならば、我は必らず御身を迎ふるの日あるべし、奈何に五年の星霜を経るまで、信を我に繋け玉はずや、また久しく言はで、迭の胸にのみ苦しむべき戀にしあらねば、我は明くる年東京に行きて父母の許を受くべし。と、聞くお今は唯怨めしげに眼を曇らすのみであつた。然れば東京に出でける後も、健三が心籠めたる書信は、六年経つた今も變らず、何時もお今が胸に新らしく響きて魂は早や其方の空に憧れ出づるのであつた。



お今母子が受取つた健三の最近の手紙では、目下は止むなき用事に追はるゝ身の、迎に行かん事の、なか／＼に覺束なければ、遠き處にもあらず、殊に汽車の旅なれば聊も危険なる旅路ならねば、一人にても輒く來らるべし來ん覺悟とならば兎にも角にも身一つにて上京せられたく。

と、こそ筆を止めあつた。

お今は餘りの無雜作と冷談に憫れはしたものの、飽くまでも自分が勝手な理屈をつけて、健三が性質に照らして見れば、然して異むべきでは

X  
X  
X  
X  
X  
X  
X  
X

無い、と思返しながらも、猶も心を決し兼て、四分の疑懼もお今が狭き胸に蟠りもしたが、健三が面を見ん日を樂に、忌はしき疑をかき拂ひて、母を見棄て家を去る悲しみも、一人旅の心細さも念はでひたすら上京を急がんものと、遂には母をも納得さして了つたので。可憐しきお今は、渠女が行途に待伏する種々の悪魔——其の悪魔が爲する苦勞や艱難を夢にも思はで、たゞ健三に一日なりと早く逢はんものと腕いたのである。急驟つて居たのである。

( 四 )

卯月の二十日餘り、橋端には花橘の匂ひて、山杜鵑天の一方何處か



らか落ち来る頃、お今はいよく旅路に上る事となつた。  
 打扮は、人目を惹かん事を虜れて、力めて滋味なるを撰びて然まで豊  
 かならざる活計に、母の心盡しに成つた吾妻コートと、お高祖頭巾に  
 身を固められた。

「お今や、妾あ何んだか夢でも見て居るやうでね、お前の行くのが本  
 統にならぬやうな気がするよ。」

と、母は涙を拭ひもあへず、打濡つて、襟の揃はぬのなどを整して與  
 つて居る。

「真箇にね、妾も何んだか……もう可厭な心地がして……だけれど  
 心配して下さらないたつて……あの心配なんかせず、心丈夫に思

つて居て下さいよそして、何よりかまあ、體を大事にして病はない  
 やうにね、可うございますか、阿母さん、我儘ばかり謂つて真箇に  
 ね、阿母さん、妾あ我儘なのよ。先方へ行つたら直に手紙を送しま  
 すから、阿母さんも時々ね……。」

と、しごろもどろ。今更のやうに聲曇らして、何か用意に取紛らして  
 は、胸の切なさを忍んで居る。

「何にね、何うせ行かなくつちやならないやうなら、一日も早く片付  
 くのは、そりやね、芽出度のだけでも、謂はゞ一生の大事なのに、  
 這麼手軽な事では何んだか心が濟まないやうでね……いゝえさ役目  
 が濟まないで、妾等の心配の荷といふものは、尙だ下りて了はない



やうな氣がしますのさ何うか、まわね。妾の思つてる事が悉皆取越苦勞になつて了へば可いがね。」

お今は何か胸頭を搾られるやうな氣がして、

「阿母さんてば、縁起でも無い事はつかり……妾あ心細くなつて了ふぢやございませんか。」

「いゝえね、お今、然う謂つたもんでもないよ……人には蟲が知らずといふ事があるものだが。」

「えッ……何んですと。」

「さ、人が能く謂ふね、蟲が知らず！ツてね、妾あ何んだか其様心地がして爲様がないの。何うかまあ、無事にお前の願望が届いて與

れゝば可いがね。」

「大丈夫よ、阿母さん。」

「お前は氣が立つてるから然う云つてお在だけども。」

「だつて阿母さんも餘り苦勞性だわ。」

「いゝえ、然うぢやないよ、好事魔多しツてね、人といふものは幸になりかゝるとね、種々な故障が起て來ては、ついしか何時も不運で居る者だよ。」

「然うばかり限つたものですか。」

「でも妾あ何んだか胸燥がしてね。」

「嫌だ！、母さんは、もう。」



と、お今は深くも氣に懸ぬらしく、母の憂慮をば所以も無く打消して  
 妾あ、また。阿母さんの事が心配でね、妾が東京へ行つて了へば嘸  
 淋しからうと、思ふとついね……。」

「妾の心配してお興れでないよ。お前が發足つて了つた後は家を疊ん  
 でね伯父様と一所になる目算だが些とだつて淋しい事はありやしな  
 い、本來を謂ふと妾が送つて行く筈なだけども、然うも行かずさ  
 妾あ實に不安心でならないのだよ。」

「否、眞箇阿母さんに、妾だつて是だけに育つて居るのだもの、豈誘  
 拐されるやうな事もあるまいし、東京へ着きさへすりや健三様が在  
 有しやるし、那麼心配はなさいでもの事ですわ。」

「お前は眞箇に曩氣だよ。だから妾あ猶心配でならないの。赤子で育  
 ツて来たんだから、何んでも正直に聞いて、其のうらを潜ツて掛引  
 する事を些とも知つてお在有でないからうつかり人の口車にも乗つ  
 てお了ひだらうし、何様人でも優しい聲さへ掛けてお興んなされば  
 親切だと思つてお了ひだらうし。」

「もう可くてよ、澤山だわ阿母さん。」

母は尙だ何やら謂はうとして居ると、荷物だけ積まして向刻から門口  
 に待たしてあつた車夫が、入口から趨然と面を出して、

「大分お手間が取れますな。お支度は未ですか。早く成さらないと、  
 今度の汽車には間に合ひませんよ。」



( 30 )

此の場合に、車夫の聲が、母親の耳には奈何に意地悪く聞かれたらう。お今は突と起つて、

「ぢや阿母さん、お健固でね、車が待つて居ますから、妾あ徐々出掛けます。今度の汽軍に乗りおくれては明日の間に東京へ着かれない勘定になりますから。」

「那樣に急がないだつて可いちやないか。何んだつて那樣に男のやうに氣が強いんだらう。」

「だつて何時まで斯して居たつて同じですもの。」

と、口には謂へど、有繫に振切り兼ねて、面眩げに首を垂れた。

「では最うお起か、道中は氣を着けてね。可いかえ、決して何様人に

も氣を宥してならないよ。」

「阿母さん。」

「何んだえ。」

「眞箇に體を大事にして下さいよ。」

「あ、あ！お前もね。」

と新調の蝙蝠傘を手渡して

「雨でも降らなきや可いが。」

「雨？、まあ斯様可い天氣なのに。」

と笑に紛らしながらお今は漸々と門を出て車に乗つた。梶棒は容赦なく持上げられて、車上の人は見返る眼の涙に曇つて見送る人は嗚咽げ

( 31 )



て、涕打かみしが、折から名残の花は、擦亂と風に連れて、五片六片無心に兩人の間に散亂つた。

二町ばかりも駆出してから、お今はふつと後方を願背いて見ると、斜になつた町の中央……我が家の門に……、悄然した母の姿が見えたので、お今は耐らず手巾で面を隠して、よ、よ、よ、と泣出して

「え、車夫さん待つてお與れよ……。」

( 五 )

一度は後へ引返さうかと、思つたお今は、何が何やら一切夢中、ふつと我に返つた時は、急立つる驛夫に助けられて、既に列車の一室に押

籠められて居た。ばたん、扉が閉つて、笛が鳴ると、聽て汽車は動き出す。疾や下車やうにも下車られぬ事となつて了つた、其が何んとなく情ないやうな氣もせられて、お今はよろ／＼と起つて、窓から首を出して、凝如と我が家の方角を眺めた。が、家どころか、仕馴れた町さへもとある山の蔭になつて、山は夕霞に籠められて其さへ臆になつて見える。

西の空には、夕映が燃えて、眞赤になつて、澄渡つた空を、わが町の方へと、鳥が二三羽飛んで行く。其の鳥の影を、我が家の椽の上で母様も見て居られはせまいか？。と、お今は頻に悲を覚えて、

「呀！、再び彼の山を越す事があらうか。母様のお面は何は見られる



事であらう。」と憶出すと、涙は何時か頬に傳はる。

「せめて山の影なりと熟と見て置かう。」

と思つて居る間、汽車は、とある林へ入つて、大曲に曲つて掘割を一箇所を越したかと思ふと、ひろくとした野へ出て彼の山は既う見えなくなつて了つた。

野は一ぱいに夕日が溢れて、うつすりと霞が棚引いて居た。次の驛へ來ると、其處では洋燈が點されて、ぼんやりした火影は微に人と人の面を照して、列車内は暗澹として居た。

お今は唯心細さが増すばかりで、漫に母に謂はれた一言々々が憶出さ

れる。

殆ど夢路を辿る心地で、恐ろしい事、忌はしい事、惨しい事、悲しい事など、引續いて小さな胸を掠めて起つたが、其の間に忘れて……、其等の忘想は消えて了つて、更に描き出されたのは、東京へ着いた時の光景。まづ立派な紳士になり濟ました健三が、數多の群集の中に立つてわれを迎ふるが眼の前に縹々として、胸は坐に動氣に噪ぎ出す。と、女は早く老けるものとか謂へば、健三に眼には我が田舎姿の、什麼に賤びて野暮らしく見えるのであらう。もしや愛想を盡かされまいか。健三様は都の美目好き女に馴れて在す筈なれば。と女心の、到底も無く其から其へと忘想を走らして、樂なやら憂慮なやら、悦しいやら悲し



いやら、腹の底の底の方での騒動はお今は生て以來覚えぬ混雑であつた。其の間に考へ疲れて、とろ／＼と睡んで、折々物の音に驚かされて眼を覺まして、また耐力も無く睡って、また覺めて、お今は夢幻の間に一夜を明して、きつと我に返って、はつきりと眼の覺めて了つた時に……、怡も窓外に聲があつた。

「静岡、静岡」

見ると、窓外は夜は曉の、しら／＼と明味があつた。心地は爽快として、自分も夜の明けかたの心地で、お今は獨莞爾した見廻すと、列車内には十五六人の人が乗込んで居て吠するもの、仲を

するもの、煙草を吸ふもの、饒舌つて居るもの、昨日乗合した初めの面とは大方一變して了つて、人数さへ十一ばかりに減つて居たので、お今は心密かに其の不思議さに驚歎した。お今の傍には、何時の間にか、六十路餘りの媼が腰を掛けて居たが、「もし、尙だ明方は寒い事でございますね。」と聲を掛けた。東京者かとも思はるゝ言調で、媼は向刻より仔細ありげにつらく／＼とお今の態に目を注げて居たのであつた。

「左様でございますね。」

「何處まで行ツしやいますので。」

「東京まで参ります。」



「左様で在有ツしやいますか。お單獨？」

「は。」

「東京は何處まで行きなさるんでがすえ。」  
 其の聲は、他の方面から來たので、お今は慌忙で、其の方へ頭を向ける時、聲の主といふは、黒の中折の帽子を被つて同じ色の二重外套に身を固めて、のめりの駒下駄に白足袋を履いて、白縮緬の縮緬の袖をちらと見える。外套をはねると古渡唐機の意氣がツた羽織の縞が見えて黒八丈の前垂かけ、見たところ大商店の主人とも見ゆる人柄であつた。年は三十ばかりでもあらうか、鼻隆く、唇赭く、頬の肉ふツくりとして眉毛濃に、色白で面長で、眼はばつちりと温雅した優しいや

うではあるが、ともすると、不思議に底光がして慄然とする程鋭くなる。而して左の頬には目立つて大きな黒丸子があつた。

「日本橋でございます。」

と、お今の答は至つて低かつた。

「え。何處です。」

と、男は耳を傾けて問返した。其の横面を媪は屹と睨めるやうにして「へん、二才奴。巧く持掛けやがるせ、黙つて手腕を拜見しやうか。何方が手腕がある一ツ手腕競と出掛けやうか。たい見居るのも藝が無えの。」

と獨言いた。

自由結婚



併し其の聲は、誰の耳にも入らなかつた。

( 六 )

「日本様でございます。」

と、お今の謂ふ間遅しと、媼は素早く引手繰つて、

「へい！、日本橋でございますか。日本橋は何方で在有います。」

商人体の男は、媼の腹の底の底まで観破つて與れるといふ面で、じろ

り媼の様子を噴めて、而して徹に肩を揺つて冷笑つた。

お今は其等暗々の間に行はるゝ兩人が紛紜は些とも氣が付かず。

「室町でございます。」

「室町？……室町は何家様で。」

と、媼は兩膝に臂を突いて、お今の面を覗き込むやうにして訊ね出す

調子の好さ。

うつかり乗つて、

「磯川と申す方へ。」

「えッ？、磯川。」

と媼は愕然として眼を圓にする。

「はい。」

「何んですか、あの、貴方は磯川様の御縁邊でも在有つしやるんですか。」



「いえ、然うと謂ふ譯でもございませぬが。」

「左様でございますか、些ども存じませんでしたの、へい、磯川さんへ在有つしやるんですか。」

と、媼は漸次に馴々しくなる。

商人体の男は熱心に兩人の話に耳を傾けて居た。

「貴媼は磯川の。」

「え……其の、つい近所の者なのでございます、本宅の方ちやございませぬよ、王子の方なのでございませぬ。何しろ磯川様と申せば御盛大なもので、王子の方には大した麥酒の製造所もございませぬし、加之御本宅の方は洋酒問屋とかで手廣く取引を行つて在有つしやるん

ださうにございます。」

と今更のやうに、お今の姿を熟々と成りつゝ、急に居住を更めて、お今を尊む氣振の見られた。お今は此の言に、種々の故障を挑けて、母を説き伏せ、獨上京の途に上りたる事の幸なりしを、心密に怜りながら、前途は増々暖かき希望のわれを照らすらんやうに覺えた。

其と知つて知らずか媼は更に、

「では若旦那の健三様と有仰る方は御存知で在有つしやいますか。」

「はい、幼い時に別れましたまゝでございませぬから、今では最う悉皆忘れて了ひました。」

「おや、然うでございませぬか。私共は能く存じませぬが王子の製造所



へも時々お出なさるさうでございませうが、王子邊では大層お標致よ  
 して調子が好くつて學問も豪勢らしくお出来なさるとか申して居り  
 ますよ、尙だ奥様はお在りなさいませぬやうでございませうが、噂に  
 は何んでも近くにお芽出度事があるとかいふ事でもございませぬの。ま  
 あね什麼方がお興入になるか存じませんが、磯川様なんかへお片付  
 きなさいました方は什麼に幸でございませう。」  
 と、意味ありげにお今の面を噴つて居た。お今は愈面を赤くして。答  
 へむ術もなく、胸は奇く騒ぎ出すに、傍を向いて微に手先を顔はして  
 居た。商人体の男は斯の時口を容れて、  
 「でがすかえ、へい。嬢さんは磯川さんのお知己でがすが、私もね磯

川さんどあ永年取引をして居る櫻山といふものでがすが、いや、何  
 處で什麼人と落合ふか知れねえもんだ。何んですか、お單獨でお國  
 の方からお出なすつたので。」

「はい」

と應接の急がはしさに苦しみしが、磯川どの知己なりといふに、お今  
 は何んぞなく懷慕しく思はれて、磯川の家内の様子も聞いて見たくも  
 あり、疾や老婆の方を打捨て、櫻山と名告れる男の方へ、話口を更  
 へんとするを老婆は蒼蠅く附絡つて、

「あの、嬢様え。」

と双方共に嬢様と呼ぶもお今は内心に可笑しかつた。



( 46 )

「何んでございます。」

「御油断なすつちや不可ませんよ。何處に限らず汽車の中は怖い箇所

ではございますが、況して東海道筋と申しますと一つの列車の中に

は鳥散な奴の一人や二人は必然乗て居りますから。」

と謂ふに、お今は漫に母の言を憶出して悚然とする。

老婆は荐ねかゝつて、

「斯の列車の中にだつて悪い奴が皮を被つて居ないとも限りませんわ

そりや必然居まさ。」

と憚らぬ高聲で謂つて、其の驚のやうな眼を睜りながら、ずらり列車

の中を睨廻すやうにして、更に商人体の男に屹と目を注げた。

櫻山と呼ぶる、商人体の男は、疑懼ともせず、唇に微な笑を漂べなが

ら、

「婆さん。」

と軽く呼掛けて、

「お前さん大層旅馴れて居るんだね、いやさ、人を見分ける眼が大分

高いらしいといふ事よ。何うだえ。俺あ何んと見えるえ。堅氣な奴

だらうか、またお前の云ふ悪い野郎だらうか、一番人相を見て貰は

うじやねえか。」

「旦那ですか。」

と媼は冷静に承けて、忽ちまた、棘らな齒を露出して、呵々と笑つて

( 47 )

自由結婚



( 48 )

「左様さね。」

と仔細らしく考へる。

「何うなんだよ、おい、判るかえ。」

と、詰る言の裡には、明に老婆の高言を、憎む氣振の見られた。

「其様にね、自分から悪黨だらうかッて、お聞きなされる方には大した

黒徒も居ませんのさ。へ、ッ、旦那なんざ尙だ正直な方でき。」

「何んだと?...ふん。」

と鼻の先で笑つて、

「尙だか可かつたね。ちや幾か悪黨なんだな、は、ッ、こいつあ可い

や。」

と、ついと起つて窓に倚つた。

( 七 )

次の停車場まで來ると櫻山は莞爾な面でお今等に會釋しつゝ、急忙しげに下車して了つた。渠は東京まで行くべき筈なるにと、お今は心に不審を立て、見たが、何時か忘れて、老婆との雑談にも飽き果て、鬢の毛汽車風に翻らしながら、窓外に面を出して、四下の風景を眺めて居た。話と繪とで見嘗聞いて居たばかりの富士山の偉大なる美觀に驚かされなぞして。

( 49 )

富士山の裾も繞つて了つて、其の日の灯ともし頃、漸々と新橋の停車場

自由結婚



( 50 )

場に下ろされた。

親切氣なる媪は、其の時までも猶側を離れず、婿の外まで出でし時、

「貴嬢、お荷物でもございますなら、切符をお假しなさいました、私取つて来て上げませう。」

「いゝえ、有難うございます。あの、誰か迎に出て居る筈でございませぬ。」

「左様でございませぬか。では其の人をお探しなさいまし。そして能く氣をお注けなさいませんと、甚麽ものが甚麽事をするか知れませぬよ。」

「はい、種々と御親切様に誠に何うも。」

と云つて居る間に、老婆の姿は疾や群集に紛れて了つた。

お今は其とも氣が注かず、氣はぼうとして、半逆上せて了つて、夢に見て居た健三の姿の見えぬかと、其處此氣と目を配れど、大浪の打寄するが如く乗客の雑踏する許にて、健三とおもはるゝ人の姿も見えぬ。然らば迎にとては來ざりしならんかと、較疑念を起して、張詰めた氣が弛むとくらくと眩惑が來る。おろくして了つて、人に揉まるゝまゝに、右へ左へ徘徊して居ると、

「嬢様何うなすつた。」

と肩を叩かんばかりにする者がある。誰？、と願背れば、こはそも！午前、或る停車場で下車て了つた筈の櫻山と名告る男であつた。

( 51 )



( 52 )

「貴下は。」

と呆れると、

「婆さん何うしました。何も變つた事ありませんでしたか。」

と言調まで變つて居る。

お今は何が何やら煙に捲かれた思で、

「別に變つた事と云つては……、無いやうでございました。」

「其は結構でした。彼の婆々といふ奴はほん引でございます畢竟貴嬢

を仕事にしようとし居つたですが、拙者が邪魔をして與つたです。

態下車た風をして油断を喰はしたのですが。奴もなかなか喰へませ

ん。甲を經とるですな、拙者が術をちやんと飲込んで居て、何も手

出しはしなかつたのでございませう。いや危険な々々！」

と謂つて探奇な眼を睜つて、雑踏する人と人と頭と頭とに向つて、嚴

密に注意をして居る。

お今は何を謂はれる事やら一切夢中、氣拔がして了つて、殆ど泣き出

さんばかりの面で居ると、

「貴嬢、何か用事がお在んなさるのですか。何んなら其處で切符を購

つて、車を雇つたが可いですよ。まご／＼して居ると、また、だに

が喰付きますよ。」

と口は優しく云つて居る。が其の眼は鋭く光つて、其の手は稻妻のや

うな迅さで、咄嗟お今が金簪に觸れんとした時であつた。件の男にと

( 53 )



んと突當つて、

「ふざけた真似をしやがるねえッ。」

と叱咤した男があつた。櫻山に素早く群集の中へ影を隠して了つた

叱咤した男はづつとお今の方へ進み寄つて、

「もし間違つたら御免なさいまし、貴嬢はお今様とは仰有りやしません

んか。もし、もしッ。」

「はい。」

辛而に面を擡げて、お今は物珍らしげに其の人の姿を左見右う見て、

「貴下は誰方様で在有つしやいます。」

お今は向刻よりの騒動も其の男の叱咤の聲も聞かなかつたのである。

「私あ其の、磯川から出迎に參つたものでございます。」

「貴下が。」

「はい。」

八

「妾はお今でございますが、健三様は來ては下さいませんでしたの。

あの其とも御病氣でも在有つしやるんですか。」

「否、何有、御病氣ぢやございません、今ぢや最う、悉皆お丈夫にお

成んなすつたんですが、只今はお留守でございます。」

其の聲音の冷さ。



( 56 )

「え、では王子の方でへも。」  
 とお今は氣遣はしげに訊ねた。

「否、商用でもつて御旅行中なんですから。然し兩三日中には何うか、お歸りなるさうで。」

お今が胸に描いて居た楽しい夢は、たゞ一言に打碎かれて了つた。迎に來たらざるさへ、既に云はれぬ苦惱を覺えたるに荐なりかゝつて身の遣る瀬無きは。六年以來焦れに焦れたる家に着いても、戀しき其の人は在らずといふ。優しい心を有てる人なりと思へばこそ、其の力に其を頼の綱に、心細き長途の旅も逢見ん時の悦しさを樂に、はる／＼と來りしものを能くぞ來た！、と懷慕しき笑面を見せんともし玉はぬ

( 57 )

は、そも什麼なる思慮ありてか、假令些しばかりの用事ありとても五日三日早く旅行先より歸つて居玉へばとて、人も咲ふまじきに！、と且は悲み且は怨んでは見えたもの、東西知らぬ地に旅鳥となつては、今は疾や詮なしと我と我を勵まして、彼男の取計ふまゝに委して、車に荷を積まして、尙だ騷擾の最中なる停車場を後に見捨てた。車の上に心細き念を連ぶをりしも、何時かは空一面に搔き曇りて、薄ら冷たき風に添つて雨さへばら／＼と降り出しては、また小止みする。斷れ／＼に走る雲のたゞすまひ凄まじく、星の光の一つだに見われざるは、心悲しきわが胸を察して居るのではあるまいか、眼に入るもの、心に浮ぶもの悲しき心地のせられぬは無く、母の諫められし健三が思



慮さへ、無想を破られたる心には、著や然うでは無いかと思はれもした。此處はさて何處であらう車の停つた門邊を見ると。若葉したしたれ柳の寂しげに雨に濡れたのが、電燈の凄まじき光に、眞蒼に見えて門前には二三臺の車が並んで居た。玄關から裡を覗くと下男下女などが絡繹として、左も急はしげに駆け違ふが見えて一目見るから旅館とは悟られた。

お今は訝しみの眼を側めて、事々しく四下を見廻した。更なり心配はまたもや胸頭に衝上つた。彼の出迎の男は疾や玄關に身を挺して、  
「さあ、何うかまあ、此方へお上んなすつて下さいまし、お荷物は後から持たせますから。」

と、云ふに、お今はおどろくして、頓には歩みも得なかつた懷慕かし  
い……、否、終生の苦樂を共にすべき、磯川健三の立派なる住居をも  
てる東京に來りながら、悠る旅館に案内されやうとはお今は夢にも思  
設けぬのであつた。さては母様の有仰られし言が實なるか。また悠く  
するは遠來の賓客を待遇す禮であるのか？  
「まあ、何んだつて斯様家へ？……お宅は遠いんですか。」  
と、お今は日頃は包み居るさかぬ氣を、ついぞ現はして屹として云放  
つた。  
「否、遠くはございませんがね。」  
「ちや何うしたのです。」



( 69 )

「主人の命令でございますから。」

「主人……主人とは誰方なんです。」

「王子の奥様でございます。」

「王子の奥様とは健三様の姉さんの事ですの。」

「左様でございます……何有別にお腹立になる事もなければ御心配の事もございません。本宅の方混雑致して居るものですから、當分此方に御逗留なすつて、其から悠々宅の方へ御案内申す都合なんでしょう。ヘム、此方は何んでございます。手前どもの取引先の田舎のお客などの泊る所でございます、から決して不安心な家ぢやございません、お室もちやんと取つて置きましたでございますから、何うかま

あお上んなすつて下さいまし、さ、さ。」

と、のべつに饒舌り散らす。お今は底氣味悪く思つて、逡巡して居ると、幾人の女中が口を揃へて、

「何うぞ此方へ。」

と口々に喚く重々の意外に、餘りの事と口も利かれず、況して抵抗ふへき氣力も無く、導かるまゝに一人の女中に躓いて行けば、手代の言に露違はず、其さへ憂慮の種で、今朝からの事を憶出すと、列車中老婆と云ひ櫻山といふ男と云ひ、また手代と云ひ、斯の女中と云ひ、何れも口數ばかり澤山利きて、親切らしく街つて居れど、何處やら底の方に冷な箇所があつて、奈何にしても氣の宥せぬ人等ばかり、其とも

( 61 )



( 62 )

是が旅の味か、他人風かど。疑ふ下から、突如として崛起つた考があつた。

「はてな、是が阿母さんの仰有つた魔がさして居るのであるまいか。妾あ魔に魁まれて居るのではあるまいか、餘り事が可笑しいもの！」と、思ふと、さあ胸が急に激しく響動めき出した。

( 九 )

幾廻かの廊下を遶つて、奥まつた。小奇麗な而も物静かな、小な一室に案内されて疲れて綿のやうになつた體を、布團の上に置くと、手代は障子越しに面を出して、

「では御用がございますなら、お手を鳴らして下さいまし、手前は是で失禮致します、へい。其から能く申し附けて置きましたから、御祖勿に致すやうな事はございませんまい。」

「然う御苦勞様でございましてね。何れお目に懸つて御挨拶を申上げますが皆様にも何うぞ宜敷申あげて下さいまし。」

と有繫に雄々しく、然りげ無き體を裝つては居たが、手代が去つて後は、一入心細さの増つて、様々の取越苦勞も、氣強しと日頃慢つた我には似ぬと、か今は獨胸を惱まして居た。其の夜は終夜睡みもせで、過し方行末の事など限りなく胸に湧立らして居たが、疲れ果てた神身は何時か睡魔に襲はれていつしか眠熟つて了つて、翌朝、障子の外の

( 63 )



板戸の縁啓けられるまで、眼を覺さなかつた。見ると、日の光映々しく、雨のうちに、照らして、昨夜の雨は名残なく霽つて、欄干の隙より見ゆる庭木の若葉したのが、拭込まれた板椽に影を印して居た。戦ぐ風に動いて、辛くも春の名残を止めた櫻の梢には、色褪せた命短かき花の八重なるが哀れに散残つて居た。

一日一夜汽車に揺られた身裡の痛みの、腕の節々に覺えはすれど、返つて其も心地好き思のせられて、昨夢の憂慮は一ト時何處へか逆けて了つて居た。手水をつかつて、化粧を終つて、朝食を済まして後は廊下に人の足音する毎に、例の手代の來たのでは無いかと、慢胸を打騒がして居た。

辛々晝飯を了へた頃に、無暗と頭を下げながら、敷居越につん出た男は、昨夜の手代では無く、彼よりは一層意地悪さうな、薄痘痕のある手代であつた。

「實に何うも遅なほりまして、へ、ッ、嘸御退屈様で在有つしやい  
ましたらう。何分店の方が多忙しいものですからへい、へい。是か  
ら手前がお供御しまして、王子の方へお運を願ふやうな次第になり  
ましたので、直にお支度をなすつて下さいますやうに。」

「王子？……あの妾が王子へ行くんでございますか。」

「左様、その王子へお供致しますので。」

「お前さん、眞箇に王子へ行くんですか。」



「御戲言を……何んだつて嘘を申しませう。」

「真箇ですか、もしや何かの間違ちやございませんか。慥健三さんか  
らは。」

と言淀む。

手代は微笑みながら、

「否、間違はございませぬ。那樣お疑もあらうと有仰いまして、斯の  
通書付もお渡なすつたのでございませぬ、はい。何うぞ御覽下さいま  
して。」

と懐中より一通の封書を取り出して、お今に手渡した。

お今は急ぎ封切切つて讀下すと……。

委細松藏にも申含め置き候へ共、妾老母こと、此の頃殊の  
外老衰致し、餘り世話をやかし、心を煩はせ候も不本意に候  
ま、心ならずも斯の度の結婚は王子の妾宅にて擧げさす  
事に取りはめ申し置き候、此の旨一寸申上候あひだ左様御心  
得下され度候。

三橋家内

お今様

と認められた。

斯の冷淡な手紙を讀了つた時、お今の唇は色を失つて、手紙持つ手は  
思はずも打顫いた。これがそも、契り置きし其の人に信を繋けて、一



人の老婆さへ振捨て、遙々旅路を辿つて来た者を、待遇すべき辭であらうか、健三が自ら迎へぬまでも兄弟姉妹多き中に、假令一人なりとも迎へに出ぬさへあるに、何事ぞ斯の手紙は？。禮を謂は、まづ我を本宅に誘ひて、そが上に事情を語るこそ至當なるべきに、簡短い冷淡な一片の書付けはそも聽て健三の妻となるべきわれに對して姉君等の爲すべき事なるか。よし、そは已むなき事情あつての事ならば、眼も瞑りもすべし、然れど、長の旅路の恙を問慰むべき片言隻語なりと書加へて無きは、餘りの所爲。斯くても我は忍ぶべきか斯は謂はでも知るき健三の不在なるまゝに、父君母君の取計ひ玉ひしに相違なしと、お今は斯くおもひつゝ、

「あの、何んでございますが、妾は健三さんの阿母様にお目に懸りたくございますそれでお前さん何んですが、室町の方へ御案内下さいましな。」

と威儀を正す。

手代は頭を搔いて、

「けれども何んでございます、何うも困りましたな、手前共は甚麼塩梅しきになつてるのか一向存じませんので、へい貴嬢を何ういふ工合になさるのか奥の方の事は些とも心得て居りませんので、へい。唯有仰つたまゝに致しまするてな譯なんで、へい。實に何うもへい何んだか紛擾して居りますが、眞箇何んでがすよ其の王子の方へ在



( 70 )

有つしつては、そりや面白くはございませぬよ。一体姉様といふ方が卑客でやかまし屋で意地悪で高慢ちきで、理の判らないへなちよこ……おつと御免なさいまし、何んと申しても手前共は家來の事でございませぬから、何うお取計ひ申すといふ譯にも行きませぬので、へいでもございませぬから、兎も角一度王子へお運び下さいました上で」利口に謂廻して、一刻も早くと急ぎ立てる。

お今は肚の中で、

「斯うなりや妾にも量見があるッ！」

( 十 )

( 71 )

都の一部を車上に瞥見して、ニコライ堂の下、目鏡橋を渡つて、明神坂を上つて、舊聖堂の裏を抜けて、本郷通を真直に王子の三橋が家に着いたのは、午後の四時頃であつた。思つたよりは手を盡した建物で製造所かとも思はる、煉瓦の建物に押並んで、境には一群の樹立が疎になつて居た。門構玄關、應接間客間など、美々しきが上に手廣くて奥床しき心地はすれど、斯は心安まるわが家ではないのである。

三橋の妻である健三の姉なる國子は、お今を迎にと玄關まで出て來りしが、健三に似るべくもあらず嫵致おとつて、色黒く肥太つて、見る



から不様なのである。身には仕立卸の銘撰の袴を着て、赤ッちやけた薄い髪は、おはつ髷とか云つて極めて高い丸髷に結つて居た。

「貴女がお今様と有仰るんでございますか。お初にお目に懸ります、妾は健三の姉でございます。」

とじろくくと、お今の服装の田舎染みたのを、嘲けるかのやうに細い目を、いと細くして居た。

「あの松蔵からお聞及びではございませうが、只今健三は留守なんでございましてね、萬事妾が心得ましてお世話申します筈になつて居りますので、はい。多分今夜か明日位には戻りませうとは存じますが、貴女ね、商人の事でございますの取引上の都合で随分ね、暇を

費える事もあるのでございますよ。」

と、毒々しく云ふ。

お今は唯面眩げに倦いて居た。

國子は重ねて、

「二三日の間にはお出なさるだらうつてね、お噂申して居たんでございますが、據無い用事が出来ましたし、根が彼様洒落した性なものでございますから、妾に萬事好いやうにと申残して行きましてね、そりやもう頓と氣にして居りませんでしたの、おほ。」

と無様に高に笑つて見せた。

斯の素氣の無い、侮蔑つた挨拶に、お今は氣臆して、腹立しくもあつ



て、頓に答ふべき術も知らなかつた。  
國子は追駈けて、

「六年目にお逢ひなさるんでございませうから、定めて健三も容子が變つて居るでございませうよ。其に貴女も最うお年頃で在有つしやるのに、能く、まあ、今まで辛抱なすつて下さいました。這度はまた、遠い處をお一人で眞箇に能くお上京下さいました。皆でもう甚麼にか悦んで居た事でございませう……さ、嘸疲れて在有つしやるでございませうに、お室も決めて置きましたから、何うぞ此方へお出なすつて、御遠慮なしに寛りとお休みなすつて下さいまし、おツつけ室町の方から母も參る筈になつて居りますから、まゐりました

ら、お逢ひ下さいませうやうに。」

と、獨で饒舌る口の達者。些とは言を温にして、憐れなる孤客を奥まつた六疊にと導き入れた。豫て用意したのであらうか、火鉢茶道具など取揃へて、床の間には一面の琴が立かけられてあつた。」

「お今さん、貴女琴をお調べになりますか……あのお弾きなさいませうの。」

と、國子は故とらしく尋ねた。

「いゝえ、どう誠に不調法で……あの不器用な性質なものでございませうから。」

「ではお茶だの花だのは。」



と、意地悪げに疊みかけた。

お今は誠教はつた事が無いので、恥かしげに口を噤んで、唯忸怩として居た。

「御存知ではございませんの、ちつとも。然うでございませうか。では

お裁縫の方はお上手で在有つしやいませう。」

「何んだつて、まあ、ほんの眞似事ばかりなので。」

「でもまあ、お裁縫さへお出来なさいませうれば格別御不自由はございませぬのさ、だけどお茶などはね、是からは些とお心掛なすつたのが可うございませぬの。覚えといつて損なものはございませぬし、加之お客などの待遇には是非ね、鳥渡心得で置きたいものでございませう。」

折から、玄關に車を引入るゝ音が、けたゝましく聞える。

國子は耳を聳て、

「母が参つたのでございます。」

お今は起つてお迎にと云へば、國子は制して、

「否、其には及びません、然うでない何んだか變でございませうから」

( 十 )

國子健三等が母親のお定といふは、丈の高い瘦ぎすの老婦人である。額高く鼻高く男にせまほしき程の顔立に、些ばかりの和氣も無く、心ざまいと嚴峻とは思はれるが、國子の下卑なのよりは優なるべきか。



共に伴れられたのは、健三が妹にて孰れも未だ年少ければ嫁いだのと云つては一人も無い。

斯の一行三人が動揺めきながら入來つた爲、閑であつた家内は遽に賑かになつて、庭に面した客間に請じられた時は、最も樂しげな談聲笑聲の、襖を洩れてお今が居室にと聞えた。

聽てお今の此の一座に初見の禮を盡さんとして立出し時、衆一時に口を噤んで、無様に珍客の面を目成つた。

國子は口を切つて、

「阿母さん、此方がねお今さんと有仰いますの、さ、お今さん週と何うぞ。」

と、座を勧める。

さて一通の紹介も済み、初見の挨拶も果て了ふと、彼等は迭にお今には解し難い談に熱中して、お今が側にありとは更に心づかぬやうであつた。お今は今更に、行末の娘、將來の姉たり妹たるべき人を待遇さんともせざる、彼等一族の心の冷たさを異しとは思へど、其を面にも見さず口を噤んで悄然として居た。

「さあ、那樣ものでも召食つて下さいまし、態々風月から取寄せて置いたのでございますから。貴女、西洋菓子はお可厭。」

「否、阿母さん、お今さんは何んにも召食らないの、妾等とは違つて誠にお上品で被入しやいますもの。」



と國子は母親の言を引取つて、憎々しく云つた。

「姉さん、姉さん。」

と今年十六になつた妹のお春といふが、急忙しなく姉を呼掛けて、

「眞箇に昨日のお演劇は面白かつた事よ。一緒にお出なさると可かつた事ね、眞箇に現金なお光さんよ、ね、そらお向ふのお光さんね、彼の方が兄様もお出なさるのか何うかと聞くから、行くんだと云つたら、其れならお伴をしませうッてね、餘程兄さんが所好なんだから可笑しいわそして、始中終側にはかりゐたがつてお在有なさるんだもの。」

と、無心に語り出して、今一人の妹お花と面見合して、何事か思出し

たやうに莞爾に笑つて居た。

母は苦り切つて、面を翳めて、

「何んだえ！、お蓮さんが其様事を？……。男の側なんぞへ無暗に行きたがるやうでは、何うせ碌な人ではありませんそしてお前達もお蓮さんと遊ばないやうにね。」

「だつて阿母さん、眞箇に氣の好い面白い方なんですもの、其に兄様が淡然して在有つしやるもんだから、そいでお蓮さんは所好なのよ何も悪氣のある譯ぢやない事よ。」

「否、初めの間は然うでも、段々猥褻な事が仕度なつて、終に親の吩咐にも背いて、好いた人に縁付いて、人が鼻ツ摘にして居るのも介



意はないやうな転婆になつて了ひます何んの氣も無しに、女だてらに男を追駈廻す奴も無いもんぢや無いかね、自体お蓮さんに限らず、今時のお嬢様達は衆然うなんだよ、あ。親の目を偷んで、夫婦約束をして、揚句に男の家へ突如に押駈けて來たりなんかして、其は野面なものさね。」

と、冷にお今をながし目にかけて。

お今は垂頭いて默然として居た。

「何が何んでも、女の身としては男の方から縁談を申込むまでは温厚しく待つて居るのが順當なのに、其が段々と鐵面皮しくなると、女の方から男に攻掛けて來ます。いや眞箇に油斷も隙もあつたもんぢ

やないね。女の氣の大きな落着濟ましたのなんざ、餘り讚めたものでも無ければ見好いものでも無いのさね。」

と、空嘯く。

斯は明に我を嘲けり、我を抵觸るなりと、お今の顔は何時しか熱くなつて、そも什麼なる罪のあつて、到着早々悠も酷たらしく謂罵られる事かど、お今は身裡を煮えくらして、思はず體をぶるくど打顔はした。而して姑と仰ぐべき人と思つたお定をば、屹と向上げると、お定も見下ろして、双方が殺氣を含んだ瞳は、ばつたり中途で衝突つた。」



母親のお定は猶も痛罵の言銳く、  
 「ね、悠う謂つちや誠に何んだが、お今様を側へおいといて意見でら  
 するやで、實に何んだがね、變なやうだけど、お今様だつて老年の  
 謂ふ事には無理はないから、聞いてお置きなすつて御損にもなりま  
 すまい、まあ妾等の眼から見ると、婚禮と謂や今時の若い人等は、  
 猫の子の遺取りか、傭人の出入でもするやうに、極軽く見てお在有  
 だけども、一生の運が是で定まらうと謂ふのだから、其はなか／＼  
 の大切なものさね、親があれば、親の氣に入らないものを貰つても  
 可けないし、其かと謂つて自分の女房だから合分の性に合はないの  
 も可けないし、釣合はぬ不縁の基つてね、身分に隔があるのも可け

なし、其は面倒つたら、斯様難かしいもんでさ。やなぞで、漸々ど  
 商賣は手廣くなつて來るし、所夫はもうね年を老つて了つたし、妾  
 も何も關ひたゝなつて了ひます、ね。健三が確乎して居ますから、  
 そりやね。可いやうなものぢやあるけれども、然ればと謂つて片輪  
 ぢやなし、何時まで獨身でも置けません、さ、其處でございます  
 連合になつて行く人が餘程伶俐でない、到底大勢の傭人から何か  
 ら何まで氣を配つて、立派に磯川の臺所を擲いて行くのが難かしい  
 と、家の繁盛を鼻にかけて、飽まで人もなげな言分。お今は身動もせ  
 ずに、俛いて、兩手を疊に支へて、口惜しげに肩を窄めて、満身の血  
 を頭へ衝上らして、氣はわく／＼して、耳鳴り眼暗暈み、咽喉渴き動



烈しく、殆んど座に堪り兼ねたのであるが、凝如と忪えて石の如く固くなつて居た。今朝は奇麗に取装ひし鬢の毛さへ、幾筋か頬に亂れて早や熱き涙の露かと其處に宿るのであつた。國子は意地悪さうに唇を緊んで、高見で見物といふ面相であつた。お春お花はお交際だけに垂頭いて居た。母は勢に乗つて、

「ですからね、是迄に參事官をなさる方の妹御だの、銀行の頭取の娘だの議員のお嬢様だのつてね、随分種々な箇所から申込もあつたのですかね行末の事を心配致しますと、輕躁に取決めて了つて、取返しの付ない事をしては何んだと思つて何處のも体好く斷つて與りましたの。中には是はと思ふのも無いぢや無かつたが私の氣に入つた

のは健三が嫌ひますのさ。え、面倒なものでね。あれはもう、是非にお今さんと謂ふ事ですから然うと取極めて了ひましたのが愈々然うとなればお今さんも餘程考へて戴きませんとね、昔の書生ツぼとは悉皆違つて了ひましたから。今ぢやもう立派に財産もあり學問あり器量もある、あの紳士とやらなんですから其に連添つて行きなされるお前さんといふ人にもまた其丈の重味が無くては困ります。いや困るどころか中々辛抱が爲難からうかと思ひますのさ。」

「其の邊の事は能く考へて戴きませんと、お互の利ではありません、はい。兎角野合の夫婦といふものは、一緒になるが早い或不縁になりますもので添遂げるといふのは滅多に無いものでございます。興



入早々家内が揉めては、是だけの家柄なもんですからね世間に對中  
ても實に何んですから其の困りもしますさ、此方では成べくの點は  
眼を瞑つて居ても、お今さんの方で好い加減に飽が來ては……其が  
また世間に好く例がありましてね野合で夫婦になつたのは、お互ひ  
に我儘があつて、つい不問になりまさ、可うございませから何んだ  
彼だつて紛紜のあるのは實に可厭ですのさ。ねえ、國や然うちやな  
いか私の家では。往昔から堅氣が看板で、好合つて夫婦になつたな  
んてえ事は、嘘事にだつてありやしません、健三一人ですの、恁麼  
可厭な變なのは。」

と、老の一徹、疊みかくつて述立てる。國子は有繫に聞兼ねてか、

「阿母さん、今更那樣事を有仰つたて、お可哀さうに、お今さんばかりが悪いんでございますまいし、そりや健三の罪でもなし、何の縁なら仕方がないぢやございせんか。」

「その縁が可くありません、私は嫌ですよ。」  
と激しく謂つて、悪返したのか、

「だけどまあね、仕方がないやね。年寄の癖に口幅つたい事を謂ひましてね、眞箇にねお氣の毒でしたね、氣に掛けちや不可ませんよ、お今さん。私だつてお嫁にしやうといふお今さんだもの随分ね、齒に絹着せず思つてる事は何んでも謂つて了はうぢやございせんか氣を悪くするのはお今さん、お前さんの僻といふものですよ。」



( 90 )

と、稍言を静にして、

「さ、お今さん、お今さん、お室へ行つて下さいまし、其とも御退屈なれば……、あ、春ちゃんや、花ちゃんも此の姉さんと一緒にお庭でも御案内申して上げな、躊躇して居ない。」

と、追出すかのやうに急立てる。お今は何時か、突俯して了つて居た。「姉様お庭へ出て見ませう、さ、在有つしやいな。」

とお春は慰顔に優しく誘つた。

「春ちゃん、其よか製造場の方が面白いね。行つて見やうぢやありませんか、ね。」

とお花は異議を申立てる。

「いうえ、製造場よかお庭から裏の田圃へ出た方が可いね。製造場は汚なくつて可けないから。」  
と姉妹の言争の間に、お今は鼻うち拭んで、身の姿致を整して誘はるゝまゝに、お今と打連れて、庭に下り立つたが、青葉若葉の、うらうらとした景色も目には入らで胸搔亂れて口惜しの涙ばかりが熱々湧き出る。」

( 十 三 )

( 91 )

健三だにあらば、一族擧つて我を辱めたからと謂つて、我が楯となつて、我を庇護つて下されるだらうに、其の人の在まさぬばかりに、長



へに忘られぬ侮辱に潔きわが身を汚された本意なさ。母なる人の言の端々で察すると、這度の婚禮は誰一人悦しい面はせぬ様子。冒頭からわれを淫奔な娘と一様に見做して、出来るだけ我を遠ざけんとこの氣組は、昨日からの仕向けにて能くも承知された。吁、間違ではあるまいか、我を見損つて居るのではあるまいか。世に人を見損ねる程、事の齟齬の出来るものはあるまいに、それを謂解かん事も胸には含み居れど尙だ馴れもせぬ母とも仰ぐべき人と争して。萬一健三の耳に入りたらば、我を何んとか思召さう？、口惜しさは胸の張裂けんばかりなれど、何事も其の胸に籠めて、よく暫は忍びて待て！、徐ろに我が信を知る人の歸り玉は、機を見て濡衣干して腹痊する時節もあらう。

と慙う我と我を慰めて、お今は密と目の中の涙を拭つた。燃え上る炎を制へたのである。がまた、思返すと、慙くも無情冷血高慢無愛想な人々の中に永の月日を送るといふは、わが終生の幸福を護るべき道ではあるまい。推して斯の結婚を遂ぐればとて、久しくも待たで家内の風波に、奈何なる禍のわが身に落来るやも知れず、思へば母様のお眼こそ高かつたと謂はねばならぬ。我は斯のまゝ身を退いて、國へ歸つて母様と睦まじく、穩かな、暖い一生を送らうか。而して戀を捨て、了はうか？。と、お今は身一つに關はる刻下の難儀を。奈何にして脱れんかと、戀と幸福との岐路に迷つて、埒も無く胸を悩ますのであつた。



( 94 )

「姉様何うかなすつたの……彼方に大きな池がありますから彼方へ行つて、鯉に歎でも遣らうぢやありませんか」  
 とお春は、氣遣はしげに、お今の面を窺つて、妙に眞面目になつて眉を擧めて居る。

氣輕な性質と覺しく、奈何にしてもお今が機嫌を復さんとてか、

「其から、兄様はお明日あたりお歸りなさいますのよ、眞箇だ事よ。

妾兄様が一番好なんだわ、阿母さんは昔の人だもんだから、一酷でね口姦しくつて爲様がないのよ、ねえ、花ちゃん。阿母さんは誰にでも彼様事ばかり有仰るんだから、だから衆に可厭がられるのよでも兄様には何んとも有仰らないから可笑しいわ、男だともつて。

兄様疾くお歸りなさると可いの、ねえ。」

と、一生懸命になつてお今の氣を紛らさうとする。

其に心を率かれて、お今は胸の鬱憤の稍解けたかのやうな思がして、二人に連れられて庭を一廻して、何時かは、うかくと田圃へ出て了つた。日は早や西に傾く田圃道を、三人はぶらぶらと歩を進めると、  
 「やつ、何うなさいました。」

と馴々しく呼懸ける者があつた。

お今は願背つて、

「貴下は……。」

「櫻山です。此方へ來て在有つしやらうとは思も懸けませんでした。」

( 95 )



( 96 )

意外です、何うして此方へ？、はい、あ、製造場を御見物ですか。」

「はい。」

と、お今は忸々して居ると、

「何んですか、お嬢様達御案内ですか。」

と、口の軽さ。お今は何んとなく可厭な心地はしたれど、黙つて居る

譯にも行かず、

「昨日はまた、種々御世話様でございました。」

「いえ、何う致しまして。何んですか、是から室町の方へお歸りですか、其ならばお伴致しませう。私も彼方へ歸るのでございます。汽車の時間も恰度好いかと存じます。何有、此方でお泊りなさるん

( 97 )

ですと……。或程、暫時御滞在なんですか。では失禮致します……

彼の、室町の方へお出向なさる節などは、何うぞお立寄り下さいま

し……穢い住居ではございますが、お茶位は購つてありますよ。」

と、懷中を探つて名刺を取出して、

「此處です……下谷區徒土町二丁目……番地。近隣でお開きになれば

直に解ります、店先に枇杷樽などが轉つて居ますから。」

と、輕快な笑を残して、櫻山は、とつかは停車場の方へ急いだ。

「姉様、彼の方何處の方。」

と、お春は怪訝な面で訊ねた。

「何處の方なんですか……一向知りませんの、昨日汽車の申で連にな



( 98 )

つた人なのですか。」

「然う——何んだか眼光のぎよろツとした可厭な人だわねえ妾見られた時怖かつたわ。」

「でもお家の事などは能く知つて居ましてね、お店とは取引して居るとか申しましたよ。」

「然う——、妾知らないわ。」

と語りながら、舊來た道へ引返す。

理から謂へば、勿論何も不思議の無い事ではあるが、お今は昨日汽車の中で逢つて、別れて、また停車場で逢つて、また紛れて、今またかけ離れた王子で會はうとは思もかけぬ事で考へると、斯の邂逅には、

何ぞ意味がないかと思はれもして漫氣懸になつて、お今は櫻山の左の頬の黒丸子をば何時までも忘れなかつた。記憶えて居た。そも何等の因縁があつての事であらう。

## ( 十 四 )

家へ歸ると、日の暮れぬ先にと、母親は夕餐食べ了つて、二人の娘を連れて本宅へと歸つて了つた、家の裡は、再び舊の如くに寂然して遊び疲れて歸り来る國子が子等の聲のみを樂しげに聞えた。

「お今様、先程は無何んでございましたらう、心では那樣に思つて居るのぢやございませませんが、ついね、やかまし屋なもんですから、あ

( 99 )



のお氣になさらないが可うございますよ此室は夕方は誠に陰氣で可  
 けませんから、お二階へ入つしやいな、随分景色が可いんでご  
 ざいますの。」

「有面うございます。ではお二階を拜見致しませう、そして何んぞ御  
 用がございましたら、御遠慮無く有仰つて下さいまし。」

と、打解けかゝると、國子は其には答もせず、さつ／＼と室を出て行  
 った。丁ツた。もしや此の室に用があつて、暫しわれを退けるのではあ  
 るまいかと思つて、お今は懶さうに身を起して二階へ上ツた。

時しも寂しい夕景色に、お今は、やゝともすると掻き曇る目に野邊を  
 眺めて居る間、ふつと憶出したは、今夜もし幸に健三の歸つて來なば

先づ此方へは來るべきに、或は其の姿の見えもやせんど、覺束なき一  
 點の望を抱きながら、見遣る向ふに、其かあらぬか、犬を連れて若き  
 紳士の、銃を肩にして野の一筋道を斯の家目かけて急ぎ來る。

近づくまゝに眸子を凝らすと、獸帽を戴いた下よりして見ゆる眼の、

健三の目に能くも似たり……と思はれた。鼻の下に八字鬚を生やして  
 頬膨み丈高く、肩には幅があつて洋服姿の雄々しさ。お今の記憶には  
 健三は瘦せた人であつたが、さては人達ではあるまいか、否々、昔に

は似るべくもあらぬ健康な體とはなり玉ひしと聞くものを、六年の星  
 霜さへ経たものは、變り玉ひしは無理も無いこと！。鼻の形、頬の肉  
 づき近頃送られし寫真に露違はぬは、此は健三様ではあるまいか？。



と思へば、お今の胸は漫に跳り出す。  
種々と念案する遑さへ無く、欄干の上に身を伸ばして、我が姿の敏き  
眼に映れよかしく願った。然れど其の人は、何も氣付かぬやうに、口  
笛鳴らしつゝ、悠々と門内へと進み入った、門に進み入った時、彼は恰  
もお今が瞰下ろす眼に……はつと氣付いたかのやうに、弗と面をあげ  
て樓上の姿を眺めた、お今の胸は愈々跳つて、驚喜の餘りに、涙さへ  
差含んだ。  
其の時、晝は見えなかつた八歳ばかりの國子の子が、裾に絡はりつく  
犬の頭を撫でながら、  
「伯父さん！」

とばかり大聲に叫んだ。  
今は疾や疑ふべきで無い。國子の夫かとも思つた微な疑さへ霧のや  
うに消えて了つた。  
お今は半ば幻心で、とつかは階子を下りて、玄關へ出やうとする。と  
恰度、國子は納戸で洋燈を灯して居たが、健三が歸りしや否やを糺す  
遑さへ無く、呆れた面で見遣る國子には頓着なしに、お今は、  
突と玄關に出て了つた。  
上櫃に腰うちかけて、草鞋脚半を解いて居る其の人は、出迎ひした  
お今には心着かぬか、子供と何事か語つて居た、お今は頓に胸塞つて  
口さへ利かれぬといふ始末ときまぎして、居ると、臺所から駈けて來



た女中が、

「お湯に致しませうか、水でも。」

「否、池へ行つて洗ふから、取らずと可い。」

其の聲は、健三の聲が、唯少しばかり大人びしだけの事と思つた。雖

然渠は、お今には言も懸けず、切戸を啓けて庭へ行つて了つた。

一度は拍子が抜けて、恍然我を忘れて了つたがお今は氣を取復して、

争で池の邊へと追駈けて、胸に溢ふるゝ思の底を一言なりと語らばや

と、恥しさ極の悪さ打忘れて、一散に庭木の間に潜つて、其の人かど

思はるゝ人の方へ突進した。折からの夕焼、池の水面は、紅流したら

んやつに眞赤になつて居た。池の汀まで來ると、後に蹤いて來た獵犬

は訝かしげにお今を向上げて居た。が、健三は其と心付かざるものゝ如く、水面を覗く巖頭に腰打かけて、後向になつて、徐ろに足を洗つて居た。

人の氣勢に、ふいと振向く途端、お今は我慢を破つて、

「貴郎、什麼に待つて居りましたらう。」

彼は惘れて

「貴嬢は！」

と冷に尋ねかけた。冴えた眼を圓に睜りながら。

「貴郎は。」

と鸚鵡返しを行つて、お今はさつと面を赤くして、たじ／＼と二歩三



歩後に退つた。  
男は冷然として居る……。

## ( 十 五 )

「貴女は……あ、若しかお今さんと有仰りはしませんとか。」  
と男は尙訝しみの眼を睜つて居る。

「では貴郎は、健三さんちやございませんでしたか。」  
と、お今は茫然其の男の面を眺つた。

「はあ、私は其の、健三の弟でございませう。」  
「弟御。」

「然うです、弟の頼四郎なのでございませう。」

「まあ、とんだ事を……。」

「何う致しまして……併し貴女は。」

「今でございませう。」

「然うでしたか。然うだらうと思ひました。始は氣が付かんかつたですよ、兄から寫真などでお目に懸つた事もあつたですがね——いや失禮致しました。」

「何んだつて貴方、妾こそ……。」

と、お今は恥しさに頓に言も出なかつた。

あゝ、健三が弟なりしか、弟を有てりとは、お今は微に耳にして居



( 108 )

たのであつた。が、是が弟とは夢にも思設けぬのであつた、餘りに健三の遅きまゝ、歸を待焦れて深く考へる暇も無く、唐突に後追などした。我 輕卒の慚しさ。弟御はそも何んぞ、思倣し玉ふ事であらう。と、お今は穴にでも入り度心地、少時は忪忪して、

「妾あまあ、とんだ失禮を致しました。」

と今更のやうにつき端なく謂出して、火のやうに熱る面を反向け居た。

頼四郎は意にも開けぬ体で

「何有、貴女には限らんですよ。誰でも能く兄と取違へて笑になるのです、希しくもありません、誠に能く宵とるさうですから。加之、

初めてお目に懸つたのですから、私を健三だと思なすつたのは、寧ろお目が高いと謂つても好い位なもので、何有！、決して御粗麁おやごさいませんと、私こそ能くお面をも見ないで、御挨拶を申上げませんで、誠に失禮致しました。何うかまあ、是からは面倒を見て截かなくつちや……随分腕白な我儘者でございますからね。……何時東京へお着になりました。

「昨日着きましたので。」

「然うですか。お單獨で。」

「は。」

「何うです、お國とは何方が面白さうでございます。」

( 109 )



「尙だ一各勝手を覚えませんものですから。」

「御道理です、其の間に兄と一所に其處らを御案内申しませうよ、貴女は……いや貴女では變だ、何うせ何んだから、姉様と呼ばして戴く事に致しませう。後で貴女から姉さんに榮轉などは餘り結構なものでも無いですから……宜しいでございませう。」

「奈何でございませうか。不束者の事でございませうから。」

「ところが僕、大に駄々ツ子なのです。先日も兄に鐵砲を贈つて與れと謂つて駄々を捏て與つたです。先生大にへこむで了つて、購つて與れたですがね、僕家の者には鼻摘にされて居るのですよ。母などは、もう格別の待遇で以て僕を操縦しとるのですが、僕關はんです、

氣に喰はぬと今ですら此の大きな頭体で地輪を踏むですわ……些と滑稽ですか、僕平氣です。此處の姉なせとは僕甚だ意見を異にして其の結果、往々……いや毎度衝突するのですが、彼は馬鹿です。僕の姉の事ですが。僕好なのは兄だけです、ですから兄も愛して居るですよ。貴女……いや姉さんも何分何うか。」

と、饒舌るわ、饒舌るわ。然雖、其の辯舌の爽なること、其の體度の輕快なること、渠は一箇これ、剽輕な無邪氣な眞率な少年であつた。年はお今から見ると、二ツ三ツばかりも年長であらうか。お今は何んとなく懐慕しい心地がしてつい恥しさを忘れて了つて、覺えず笑を催しながら、



( 112 )

「何うかまあ、届きません点はお教へ下すつて。」

「お教へ申すどころか：嘸議れてばかり居るでせう。何しろ斯の無遠慮です。一体其が看板で且自慢であるですな。餘り譽た自慢でも無いですが兄が不在で嘸何んでしたらう、つまらんかつたでせう。併し何有直に歸ります、明日あたりは先生、大元氣で歸つて來ますよそりや歸らずに居られません、兄は甚く待つて居たですよ、實際です。僕大分愚弄つて與りました。さあ入らうぢやございせんか。晩には御馳走を致します、美味くはないですが小禽を少しばかり撃つて來ました。是とても兄の賜物なので、兄が購つて與れた鐵砲で大に功名をしました。僕も兄が不在なのが甚だ遺憾なので、居ると

今夜は、へこまして興つたのです。何故かといふに、先生鐵砲を購ふ時に僕の技倆を侮蔑して甚く不服を並べて居つたですから。」

と、まくり上げた股服を下げながら、葦に燈火の火を移して悠然と動き出す。夕日は製造場の一角に落ちて、今や樹立の上にかゝり、蒼然たる暮の色は遠近となく漸渡つて、池の水面は薄暗くなつた。折しも何を見つけたのか、樹立の奥の方で、獵犬が一齊に吠出した。頼四郎は屹と耳を聳て、頻りに口笛を吹鳴らしたが、犬は猶啼止む氣色が見えぬに、目の色變へて、

「姉さん、何卒お先へ。」

と、謂つて、一散に後へ引還して聽て木蔭へ姿を隠して了つた。

( 113 )



## ( 十 六 )

「頼さん、お前お今様にお逢ひかえ。」

と、國子は茶を注れながら、慳貪な聲で謂つた。

「あゝ、逢つたさ。逢つて一場の會話を試みたが、いや案外だね、案外だつたよ、姉様。」

「何が案外だつたの……あれが兄様のお内儀さんにならうといふ人のさ、能く御覽だつたかえ。」

「見たよ。」

「立派な……いやさ、好い娘だらう。然うさ先づ娘といふところだね

彼の品格がさ」

「何うして！、なか／＼別嬪だよ。僕最初、不様な田舎娘が来るだらうと思つて居たが……眞箇案外だつたよ。堀出し物といふ奴なんだらう。斯うなつて見ると姉様皆悉僕を欺して居たんだ、實際寫眞やか百倍も立勝つて居るもの、田舎の寫眞屋といふものは下手で粗末なんだから、人を損ねるよ。」

「可厭な頼さんだ！。妾が何時お前を欺しました。」

「欺したさ、欺さないとは謂はさんぞ。姉様は何時か然う謂つたよ、お今さんは此の頃來た鳩胸の女中に能く似て居るつて。」

自由結婚



さんを見なかつたんぢやないかね。見ないで那樣非難がつけられま  
すか。馬鹿々々しい。」

「然うさ。だから見ないで解るものかと主張したら……僕がだよ。見  
なくつても屹度然うだと押張つて居た癖に！。見よ、最後の勝利は  
誰が手に落ちたかを！」

と、胸を突反らして誇つて見せる。

國子は口惜しさうな面をして、

「だけどさ、頼さん。餘り威張つて貰ひますまい。彼ならば假設然う

謂つたところで澤山の誤謬でもありますまいよ。」  
と、空嘯いて見せる。所以冷靜を粧つて。

「大誤謬！、蓋し三橋國子女史一生の恥辱と謂はざるを得ないやね。  
僕をして公平に且卒直に判断せしむれば……だね云分の無い女さね  
彼ならば磯川健三の妻として、何處へ押出して立派なものさ、聊  
も恥づる点はないよ。兄様は實に好い妻君を持つたんだ、彼をして  
鳩胸のづんぐり先生と較べるなんぞは、寧滑稽さ。」

「おやく、おやおやおや。大層お氣に入つたと見えますね。頼さん  
大層お目が高くつて在有つしやるのね。」

と、無暗と驚いて見せる。

「勿論さ。」

「其の先は……無論かえ？」



「混返しは恐れます、真箇のところ、非難はないね。品格がある、容貌はよし、其で温和しくつて、東京にだつて滅多に居ない美人さね。是だから長男に生れたいものだ」と云ふんだ。」

「何故」

「何故つて姉さん、是が僕だつて御覽、到底阿父さんや阿母さんが聴許れて呉れはしないや。」

「健三だつて同然然うさ。這度のお話だつて纏るか纏らないか、尙だ能く解らないんだもの、妾の考へちやまあ、餘り……どころか大變に好ましくないの、阿母さんとも云つて居たんだよ、何うにかして國へ歸して了ひたいものと思つて居るのさ。那麼婦人で可けや妾あ

幾人でもお世話申します。」

「何うか願ひたいね……是非！」

國子は躍起となつて、

「真箇だよ、是まで申込んで來たのを御覽なね、中には随分醜いものもあつたけど、其でもお今様なんぞとは、到底較べられたものぢやない。何うも今度のはお廢にしたいね。」

「よろしい！、誰が何んぞ云はうと、僕一人で兄様に加擔して、斯の縁談は纏めて了ふ。姉様は此の頃大分邪慳になつたよ。」

ど、頼四郎は眞面になつた。  
「何うせ妾あ邪慳だともね……毎度着物も縫つて與げないしお小遣も



與げないもの。だけごね頼さん、女でなくては女の鑑定は出来ないものだよ。お前のやうに容貌にはかり見惚れて居ても爲様がないよ」

「でも姉様は、容貌が悪いと非難して居た筈ぢやないか。」

「そりや容貌だつて感心もしないしさ、第一氣立がね。」

「姉さんの様に好く無くつちやね……然うだとも。は、ッこれは大笑だ。」

「もう妾は何んにも云ひますまいよ。氣立が好からうが悪からうが、

お前の奥様でもあるまいし、那樣可厭味を云はないでものことです。」

「誰も難癖などはつけはせんよ。そして其こそ姉様の奥様にするんぢやあるまいし、兄様の氣に入つてさへあれば澤山だ。」

「其の上お前といふ味方がおありだから、お今様も氣が強いやね。妾

もお今様のやうな方に生れりや可かつた。」

其の時、次の間に微な足音がしたので、頼四郎は其と眼で知らして、

兩人謂合はしたやうに口を噤んで了つた。

玄關の邊で、またも犬がけたましく啼出した。

頼四郎は面を擧めて、

「今夜は嫌に蒼蠅く啼きやがる。」

## ( 十 七 )

微な足音といふはお今のであつた。



お今は一室にのみ閉籠つて、人々の前に出ぬといふは、因循とや笑はれもせまいかと思つて、従々と納戸の口まで來ると……我が名の國子と頼四郎の口から進るに、卒然足を停めて襖の外に名みながら密と耳を聳て居たのであつた。而して引返さうとした時、其の微な足音の頼四郎の耳に入つたのであつた。

お今の身裡の血は一時に騒出して、今更のやうに口惜涙に暮れて居た國子が言様の毒々しくも面憎くなるに反して、頼四郎の心の花の香ばしさよ。わが粟忽は聊も咎める氣色の無いばかりか、姉に悖つて、われを辯護し、われを疵保はんとする情の有難さ。斯の人こそは、敵の中にわだ一人の味方なれ！と、お今は漫に感涙に咽つたのであつた。

夕餉の膳さへ頼四郎の謂ひしやうに、一同打揃つて箸を取るでは無くお今一人家族と時を隔て、淋しい食事は果てたのである。心地何んもなく惱ましくなつて、食さへ咽喉へは通らず、たゞ心外の涙の熱く頬に傳はるのが覺えられた。が、斯ばかり胸を痛めて、もしや病の床に就いては、其こそ身の大事。然なくとも四面楚歌の聲……とも謂はうか、一家舉つて排撰の聲の高い中に憎者とはなつて居る身が、病でもすれば什麼なる愛日に逢はうも知れず。と無理に氣を取復して見たりなどして今宵健三の君の歸り玉はずば、我はそも什麼にすべき？。斯うまでに冷遇される事と知つたならば、母の諫に従つて昔のまゝの境遇に身を安んじて居たものを、遙々と東京三界まで來て、六年の間胸



に描いて居た楽しい夢を破壊されて了はうとは、夢にも思はぬ事であつた。樂しき日！、と待ちに待つて居た其の今日は、われを意の外なる苦艱の地に突落す今日であつたのであらうか。

お今は口惜しい事、腹立しい事、悲しい事、心細い事、東京へ着いて二日と経たぬ間に、限無い悲みと而して口惜しさを嘗めさせられたのであつた。お今は、其の希望の光の餘りに輝かしかつたので、一方には斯る苦痛の生れて來やうとは思つて居なかつた。其の愚さを思ふと、在るに効無い心地もして、お今はたゞ泣いて見るばかりであつた。斯の憂を拂はんには小説こそ可からめ！、と違棚に二三冊載せてあつた書を拿つて、燈火排立てつゝ、縮き始めた。が一生の大事の身に迫つ

た時機なればか、眼のみ文字を辿れど、心は其には移らず、胸は來さず、往きの憂に攪亂れて、頭は千鈞の推もて壓さるゝやうに重かつた。夜は早や九時頃でもあらうか。微睡まれやうとは思はぬが、枕に就かば些とは心の静まる事かど、教へられた如く押入を開けて、寢道具を取出さうとして居ると、誰？、人の來る氣勢のするに、思はず悸として胸轟き言効も無く身を縮めた。足音は襖の外に止まつて聽て芬の高い煙草を匂はせながら、襖を啓けて面を出したのは頼四郎であつた。

「最うお寢みですか。」

「否、まだ寢みは致しませんけれど……まあ、お入り下さいまし。」

と、お今は極悪げに、押入の箇所に突立つて居た。



「お邪魔でございませう、別に用事も無いですから、また明日でも。と早や立去らんとするを、お今は本意なげに其の面を見入つて、片手を頬に當がつて居た。

「否、お邪魔なところぢやございませぬ、向刻は實に失禮致しました」と又も想ひ浮べたやうに面を背向けて居る。其の半面は明に火影に照らされて、豊肥とした頬には、淡く血潮をさし上らして居た。

「尙だ貴女彼様事を……然し何んだかお顔の色が悪いやうですが、種々な事をお考へなすつて、お氣分でも悪くなすつては可けません。

一兩日の中には、兄も歸つて参りませうから。」  
斯の温い言に、お今は覺えず慄然とした。が、然り氣無い体で、

「向刻はまた何事もございませんでしたか。」

「何んです。」

「犬が大層鳴きましたか。」

「あ！、あれですか、何有別に……何んでしたよ。迂散な奴が邸の外を徘徊して居つたです。」

「え、迂散な奴が？」

と、お今は眼を睜る。

「何有、通行人だつたかも知れんです……もう御心配なさる事は無いです、犬に威嚇かされて其奴は何處へか立去つたやうでございませうから……其よりか貴女大變にお顔の色が悪いです、氣をお注げなさ



い。而して餘り心配なさらんが可いですな。」

## ( 十 八 )

「貴方、何を考へ込んで在有つしやいます。」

「いゝえ！、何も考へて居るのではございませんが。」

「お眠いのですか。」

「眠いどころか、寝やうと思ひましても到底寝られないのでござい  
ます。」

「何故です。」

「何んだか淋しいやうな氣が致しまして……加之何んだか胸噪がして

氣が落着きませんでね。」

「餘り心配なさるからでせう。心配は可けません。非常に身體を損ね  
るですよ。」

と難しい事を謂ひ出す。

「別に心配といふ譯でもございませぬのですが……つい、詰らん事を  
考へ出すものですから。」

「では階下へ下りて姉と何んぞお話をすつたら可いでせう。ね、何う  
です。」

「否、妾は姉様等のお氣に入らないのでございませうから、無暗にお働  
へ行つたりなごしますと、反つて何んでございませうから……御迷



「惑かとも存じますから。」

と、お今は急に聲を曇らせる。

「姉がまた何んか失禮な事でも謂つたですか。關はん。僕叱つて與りませぬ。一体彼女は冷淡で我儘で、僕非常に嫌なんです。でも不思議に人の妻になつて子まで有つとるです。ね、そして家庭は極めて圓滿なのですよ。あれでも、僕甚だ不思議で耐らんです。ですから僕時々謂つて與ります、世の中は捨てる神あれば助ける神あり！、で妙、不思議なものだつて！。すると彼女は面を眞赤にして青筋を立て、慍るです、僕がまた妙なんです、其の面を見るのが奇態に面白い……ちえすと！、と手を拍ちたくなる。」

一種の調子を有つた其の邪氣の無い語り振りに、お今は、つい失笑しなくなつて、挨拶に困つて、忸怩して居ると、

「ですから、姉が夫禮な事でも謂つたのでは無いかと、僕想像したのですが。」

「否、別に何んとも有仰つた譯ぢやございませぬが、彼方に限らず、皆様が妾の參つたのが、大層お氣に召さない御容子でございますから。」

「成程！……。」

と、考へて居て、

「其は斯うですな、貴女はです。尙だ健三が歸つて來ぬといふ事をお自由結婚



忘れなすつては可けません。兄さへ歸つて來ますれば、形勢が一變  
 します。多分其の都合だと思ひますから那樣心配はなさらんが可い  
 ですよ。今日は母と妹とが參つたさうですが、甚麼風でした？、母  
 も随分自分の感情を隠さない方ですから、お氣に障る事もございま  
 したらう。」

と、問はれると、お今は漫に、晝間の事を憶出して、口惜流に暮れな  
 がら、斯くまで、故障の多い結婚は、果して思ふ如く其の望が達せら  
 るるのであらうか？。健三は謂ふまでも無いこと、斯の故障は恐れぬ  
 としても、我は其中に立ちて、一片の誓を健三に實行さするほど立派  
 な婦人であらうか。と、心弱い考へを惹起しながら、お今は默然とし

て居ると、頼四郎は其とも知らず、

「母も何か面白く無い事を謂つたを見えますね。可いですが、可いです  
 磯川の家族には頼四郎といふ者が居る事を忘れて戴きたくない。追  
 々母や姉にも謂聞かして、不都合の無いやうに致します。」

「否、那樣事は何卒お止しなすつて下さいまし、皆妾が不束だからな  
 んでございませうから。妾は何故、鐵面皮しく此方へ參つたのでご  
 ざいますか、今になつて見ますと、其の氣が知れませんか。」  
 「詰らん！、詰らんですよ、那樣事をお考へなすつては涯が無です。」

「でも妾は斯のまゝ……。」  
 「何んですと。」



「一層國へ歸らうかとも思ひます。」

「お國へですか。」

「は。」

とお今は泣膨らした目を密と拭いた。頼四郎も悄然して、垂面いて了つて、

「そんな事を有仰るツて、貴女は其で好くつても兄が困ります。」

と、真面目になつて、

「そして姉や私が附いて居ながら那樣事になりましたは、兄が何様に感情を害するか知れんですよ。」

「其でも……妾は設甚麼壓苦い思でもしませうが……耐へはしますけ

れど、其では却つて健三様のお利で無いかと存じますの。」

「では僕の考も逃ませう……か。」

と、頼四郎は急に威儀を整して、屹とお今の面を噴つた。

( 十 九 )

奈何なる事の其の人の口より漏出づるのであらうかと、お今は息を凝らして其の人の面を噴つた。

「貴女が那樣……國へ歸つたりなされますと、其こそ兄は婦人一人を欺いて、貴重な一生を犠牲に供させた事になるではありませんか。那麼氣弱い事を有仰ツては自他のため非常な不幸ではないですか。」



兄をして……です、ね、婦人一人を片輪にさして、輕薄の惡名を負はすのも、弟の身とて傍觀しとるのも忍びなければ、貴女をです、可うございますか。貴女を……失望させて、慍らして……です、一生を不幸にして、了ふといふのは、僕忍びんです、耐へられんです。また國へ歸らうなどいふお考へは失禮ではあるですが、お一人で遙々御出京なすつた貴女にも似合はんと謂はなければならんですね。」

「恚は申しますが、貴女は到底吾々の一族と氣が合はぬとすると、終生貴女は不愉快で居なければならん。其よりは一層といふお考があれば、兎も角もでございますけど、成べくならば……。」

と、口を噤んだ。

お今は決心した面色で、

「妾は實に詰らない事ばかり申しました。最う御心配なさらしないで下さいまし、甚那事があらうと、健三様のお心の滄らぬうちは、お世話になりませうでございます。」

「其が可いですが、其が可いですが。勿論さうなくてはなりません。さあ最う這もお話は休にませう。何うです階下へお出でなすつては？ 姉も居るですから何か變つた話でも致しませう。お一人では反つて氣が鬱いで可かんですよ。姉とても段々お昵近になりますれば、自づと心安くなりませうから……お可厭ですか。」

「でも妾が参りましたは。」



「何故です。ね。開はんです。よ。何んですか。那樣にお氣に障るやうな事を申しましたか。」

と、頼四郎は不満の体である。

「別に妾は何んでございますが。向刻も鳥渡お聞き申しますと、大層お氣に召さない御様子でございませうし、妾も何んだか極が悪いやうな氣も致しますから。」

「では何んですか。もしや向刻姉と貴女のお噂をして居つたのをお聴きなすつたのちや有りませんか。」

「いゝえ！」

「然うですか。お隠しなすつちや可かんですよ。」

「では申しませんが、實は……」

「お聞きなすつたのでせう。」

「はい。何有、ちよいと。ちよいとお聴き申しました。彼に相違ないのでございますから、妾は何も……頓と平氣なのでございますが、姉様がお蒼蠅いでございませうと存じまして。」

「何うも彼が姉の癖なので。」

と、頼四郎は氣毒げに、

「だから僕姉を好かんですな。然し意からといふのでは無くたゞ一時僕に抵抗して見たくつて謂つたのでございませうから、深くお氣にお懸けなさる事も無いかと存じます……。ではお寢なさいまし、明



( 140 )

朝またお目に懸りませう。」

「まあ、貴方、可いではございませんか。」

と、お今は慌忙して留める。何んもなく懷慕しく、離難い氣したので。

「いや大分お邪魔したですよ。」

「何んだつて貴方、那麼事が……お話しなすつて下さいました。氣の故か、今夜は何んだか氣味の悪いやうに淋しくつて仕様がございませんから。加之、向刻に有仰つた鳥散な奴……お邸の周圍を徘徊して居る奴があつたと有仰つたのが、氣に懸つて、底氣味が悪いやうでなりません。もしか……。」

と、お今は覺えず口を滑らしたのであつた。渠女は頻に櫻山と謂ふ怪しの男の事を憶浮べて居たので。

「もしか……が何うしました。」

「何うと申して別に……。」

と言淀む。

「盗人でも入りはせぬかと有仰るのですか。」

「ま、然うなのでございます。」

と、お今は切抜けて了つた。

「其ならば大丈夫です。」

( 141 )



近所の紡績會社製紙會社では、頻りに汽笛が鳴り出して、階下の柱時計が、無心に而して能辯に十時を打つたのは、大分合刻の事であつた。世間は寂黙して、銘酒屋を素見歩き職工等が、耐力も無い事を謠ふやら喚くやらして行くのが手に取るやうに聞える。山の下邊で、凄まじい汽車の地響がして、其が漸次に幽になつて、遂に聞えぬやうになつて了ふと、垂頭して默然として居た頼四郎は、趨然と面を擡げた。

「併し、兄は幸福者ですよ。」

と、染々と、歎息するやうに謂つた。

「何故でございます。」

と、お今は不審らしく訊ねた。

「何故と謂つて、其は所以も無いですが。」

「所故も無くつて貴方、おほ。可笑しいではございせんか。」

「可笑しいですかね。」

と、眞面目に、答を需むるかのやうに謂つた。

「ま、然うではございせんか。」

「併し兄は幸福者ですよ。」

と、頼四郎は大聲に謂つて、

「第一、貴女といふ……がですね、兄を非常に愛して在有つしやる。」



( 141 )

「其が幸福なのでございますか。」

「幸福でなくつて何んでございませう。」

「大した不幸かも知れませんわ。」

「何故？、僕那麽不幸者なら、今直にでもなりたいですね。實際。」

「ひよつとすると成つて在有つしやるかも知れません。」

「僕が……ですか。」

と、呆れる。

「は。」

と、云つて、お今は艶いた笑聲を漏らした。

「お愚弄なすつては可けません。」

「眞箇」

と、お今は軽く謂つて退けて、爾する。

其の時、ついと闇から起上つて、こつそり、驚足で階下へ下りて行つ

た者があつた。誰？。兩人は夢にも其を知らなかつた。

少時すると、

「頼さん、頼さん——。」

と、階下で、疋走つた國子の呼聲がした。

頼四郎は忌々しさうな舌打をして、

「呼んで居るですから、失禮致します。併し大變にお邪魔をしました

よ。ではお寢み！」

自由結婚

( 145 )



( 146 )

「でございますか。」

と、お今は洋燈を持って、階子段の上口まで見送つた。

「もう可いです。」

「は。」

とばかり、お今は一人取残されるのが本意なげに、頼四郎の姿の間に消えて了ふまで見送つて居た。

室へ歸つてからも。

「眞箇に優しい方。」

と、呟いて、恍然として居た。

母、姉には露ばかりも似て居らぬばかりか、心様優しく、同情深く、

( 147 )

體度の此の上も無く邪氣の無いのは、健三に優らうとも、よも劣らうとは思はれぬ。設、一族擧つて我を酷たらしく待遇へばとて、恚る頼もしい味方のあるからは、畢竟は自分幸福ではあるまいか。何を苦しんでか、自ら焦心で自ら懊惱して居るのであらうか。と、お今は全く頼四郎の温い心に絆されて、其の夜は力めて悲しい事を忘れやうとした。が、ふとすると、其がまた、母に謂はれた魔に魅まれて居るのでは無いかと思はれもして、何れにしてもお今は、心の痛む事ばかりであつた。

翌朝眼を覺ますと、障子には長閑に日が照つて、雀と雀との啼ぐる聲が、宛然物の衰立つやうに聞えて、其の樂しげなこと。お今は卒然と



枕を擡げて、思はず世の樂しさに心着いて莞爾して、胸の憂の急に洗去られて了つたやうな心地で居ると、ふつと耳に入つたのは、

「昨夕何時にお歸りだつた？」

と、國子の聲であつた。

「何時たつたかね。」

と、男の聲……其の聲は頼四郎の其とは些とばかり違ふかと思はれもした。

「大變遅かつたやうだつたね。」

「遅かつたよ。」

さて、健三が歸つたのではあるまいか。と、お今はふいと思付く。胸

の動悸は急に激しくなつて、歡喜の情はむらくと我を煽り付ける。

「何か變つた事が無かつたの。」

「何んの變がッ？」

と、怒を含んだ聲であつた。愈々間違なしと思案を定めて、お今は突と立起つて、鬢のほつれを撫で上げるやら、面を抵くやら、襟を整すやら、襦袢を合はすやら、忙はしく身繕して階下へと駈け下りた。

## ( 二十一 )

手洗を遣つて、心ばかりの化粧を凝らして、お今は納戸の方を出ると是はまた！、思ふ主の健三はあらで、頼四郎と姉とが何事をか熾争つ



て居るのであつた。兩人はお今の姿を見ると、捏と口を噤んで了つたが、國子はじろくどお今の化粧をした顔を眺めて、然も侮蔑んだやうに、眼の中に一種の冷笑を湛へた。

頼四郎は極めて真面目な面色で、今猶胸の静まらぬやうに、怒氣を含んだ面色怖らしく、屹と姉を睨まいて居た。そも何事か言争つて居たのであらう？、と、我が身に係つた事ではあるまいかと、お今は漫に胸を轟かした。

國子は憚らぬといふ面構で、

「だつて頼様、子供の云ふ事には、ね、僞は有りはしないよ邪氣が無いんだもの、正直な点を謂ひませう。僞は吐きませんさ、はい。妾は

何も見た譯ぢやないのだけども、眞箇だよ、見も聞きもしないけども、昨夜は頼さんが何處に何をしてお在有だつたか知らないけども子供が然う謂ふぢやないかい」

「詰らん！、何を云つてるんだ、好い年をして！」

「そりや何爲妾は婆さんです。」

「慍らずど可いちやないか。其は實際昨夜は遅くまで邪魔をして居つたのさ。」

「ほうらね。」

と、國子はしたり面。

「ほうらね、が、何うしたんだ。」



「庭でも一緒になつてお在有だつたらう。」

「なつて居たッ。」

「威張らなくつても可いよ。」

「誰が威張るもんか。其がまた……一緒になつたから何うしたといふのだ。」

「何うもしないけれど。」

「何うもしなければ、何んだと云ふのだ。」

「やかましいね、静におしよ。妾お聾ぢやないの頼さん。」

「知つとるッ。」

と、頬は膨れる。

「知つてお在有ならば、も、些と聲を低くして頂戴……頼さんは妾の事を無愛想だの、冷淡だのと云つてお在有だけでも、頼様のやうに那樣に早くから仲好になつても困りまささ嫂といふものには那樣に用事があるものですかね、へ——然うですか。」

「可笑しな事を云つてるね、何を云つてるのか、要領を得ない。」

「然うね、要領を得ますまいさ。妾で見れば何も不思議は無いやうなもの、他人から見ると随分疑も起きますよ。兄様がお聞なすつたら、變な氣持もしやうかと思ひますの。」

「姉様、おい。本氣で那樣事を云つてるのかね。僕はまた餘り姉様の冷淡なのを攻撃したので、其で那樣冗談を云つてるのかと思つたら



眞面目なのかね。驚いたよ、事が餘りとぼけ過ぎてお話にならない」  
 「そりや妾は無愛想でございませよ。何うせ頼様のやうに行届きはし  
 ませんの。併しね頼さん、豈那樣事があらうとも思はないけれども  
 他人から那樣噂をされて分疏の出来ないやうな事はお仕でないよ。  
 そしてお今様もですわね。」

と、意地悪さうな眼で、じろりと見て、

「餘り弟などの側へお寄んなさらない方が可うございます。弟は實  
 に氣輕な質だもんでございますから、貴女がお優しいと、増長しま  
 して、また昨夕のやうに遅くまで一つ室に話聲の聞えるなどは餘り  
 讚めた話ではありません。」

國子は憊る家柄に生れながら、憊までに口さが無く心賤しきは、そも  
 奈何なる故であらう。お今はさつと、面を眞紅にして、暫は俯いたま  
 り、呆氣に取られて居たが、些ばかりの事とは云へ、他事にはあらず  
 辯解せでは棄置難しと、

「そ、那樣事を有仰つては、妾ばかりか弟御も御迷惑なさいませうし  
 ……足らはぬ妾ではございますが、那樣事を云はれる覺えは些ども  
 ございませぬ。お庭で御一緒になりましたのは。」

と、疾や涙聲になつて、恥しげに事の始末を語ると、國子は失笑して  
 「何んですつて? ……まあ、お若くつて在有つしやいますのに、お目  
 でもお悪いんでございますか。健三と申せば貴女是から夫と仰ぐ人



( 156 )

ではごさいませんか。弟と間違ふといふ事があるものですか。」

と、行儀を崩して笑顏れる。

「餘り滑稽で居るぢやありませんか。ぢや一層の事取換へて了ふと可  
いわ」

と、又一しきり高に笑つた。

頼四郎は苦り切つて、

「呆れて口が利けないへらず口だ。何んといふ下素な事つたえ。馬鹿  
ッ！」

と一喝する。

「え、え、何爲妾あ馬鹿なの。」

國子は獨に笑しがつて居る。

お今の面は火のやうに熱つて居た。

## ( 二 十 二 )

朝飯も果てた後、國子は人と演劇見物の約束があるとか云つて、九時半の汽車で東京へ行つて了つた。お今は斯の午前こそ、遅くとも健三に逢はれる事と思へば、何んもなく胸が跳つて、心も空になつて居る。何うにも室には、熟と座つて居られぬに、玄關に近い應接室に行かうものど、衣紋繕つて立出づると、階子の下で出會頭に、はたと頼四郎に出會つた。お今は何んもなく面を紅くして、二三尺後に身を退くと

( 157 )



( 158 )

頼四郎は然あらぬ体で、例の悪氣無く、

「姉は居りませんですか。」

と云つて、通りかゝる下女を呼止めて、

「奥様は何うしたえ。」

「奥様でございますか。あのお出かけになつたやうでございます。お演劇ださうでございますよ。」

「一人でかえ。」

「はい。」

「一人でかえ、怪しからんね、お客様をお連な申せば可いにお今さん貴女をお誘ひも致しませんでしたか。」

ど、お今の方へ向く。

「否、何の道妾はお供を致しても居られませんか。」

でも人を待つてるといふものは、誠に無聊なものでございますから人群へでも出て居ると氣が紛れて居るですよ。萬事姉は御覽の通りの思遣なしですから困ります。」

「其も是も妾が足はぬからでございます。」

「那樣事があるものですか……二階へ在有つしやい。寫真でもお目に懸けませう。」

と、強つて誘ふに、辭まじ言も無く、お今は頼四郎の書齋と覺しき和洋折衷の室へと導かれた。開放した窓からは、漸う暑い日の差入つて

( 159 )



壁にかけた油繪の大なる額の裸体畫は、其の半身を照らされて活如として居る。圓形の卓子の中央に置かれた橋の花の香は室へ満々して、風の吹入毎に芬々と鼻を衝つ、室の体裁などで見ると、惟ふに頼四郎は西洋趣味に富んで居るのもあらうか。頼四郎は飲さしの葉捲を燻らせながら、

「僕はもう、御存知の通り二男であるですから、這樣處に押籠められて居るですな。勿論家に取つては兄の様に必要な人間でも無いですから、餘り不平も云はれんのです。其の代にはまた、責任も無いですから、近々のうちに又ニューギニヤの方へでも行かうかと思つて居るです。日本ばかりが自分の骨を埋める地でもございま、まいか

「さ」

と、己が事業の經歷など説明した。

「では健三様だけは始終此方に。」

「然うです。兄が居らんければ、畢竟商賣が出来んのですから、出る譯には行かんです。製造所の方も本店も支店も悉皆兄の監督の下にあるですから。聽て結婚なさると、貴女も旁御盡力下さいまし、其の時にになると、母でも姉でも今の様に仕向けは致しますまいから何うかまあ、其迄御辛抱なすつて下さかいますし。」

其の懇切なる言に、お今は幾ど感じ入つて、溢るゝは涙、熱い雫は、ばらばらと膝の上に亂れ落ちた。



「否、妾などには到底那樣才器がございませぬけれど、何分にも宜しくお願申します。そして貴方と御一緒に此方で御商賣をなさると、健三様をはじめ、妾まで什様に心丈夫でございませう。お單身で御遠方へ在存つしやらなくつても可いではございませぬか。」

と頼四郎を見上げる其の眼、宛然火の如くに燃えて、何事か語ると見られた。頼四郎は思はず一種の哀觀に撃たれて、稍少時口を緘んで居た。

「何有！、僕などが居ても何うせ何んにもならんのですから其に三四年前から企てた事業もございますし、父や母は不賛成なのですが、是非、も一度行つて地の形勢を察して來やうと思ひます。」

と謂果らざるに、轢々ど車の響の門前に聞えて、聽て門内に砂利の軌ひ音がして、玄關際ではつたり止つて了つた。

「兄です。」

と、頼四郎は急しく起上つた。

「健三様でせうか。」

「然うです、間違ありません。」

## ( 二十三 )

お今が想像したに違はず、健三の風采は全く一變して居た。清しい眼削けた頬など、往昔の面影を留めては居るが、額は廣くなつ



( 164 )

て、口髯は豊に、體度何んとなき貫目づきて、重々しくも嚴めしくなつて居た。

渠は出迎したお今を一目見て。微笑みながら。

「来たか？」

と、然して喜悅の情の面に現はれたとも思はなかつた。

「はい。」

謂ふまでも無く、お今は内心甚だ平で無い。

六年の星霜は實に短しといふでは無い。閉散で且つ平穩な田舎生活を送つて居たとは異つて、商業と家事とに醒醒し、激しく身神を勞する事なれば、美しかつた少年の血色褪せて、額に刻む皺は、明かに經營

慘憺の迹を語つて居るのであつたお今は先づ己が室へと健三を誘つて一別以來の久瀾も徐した後、

「お變りもございませんで。」

悦しさに聲音は顯えて居る。

「體だけは健康さ。」

と横柄に謂つて、

「お前些とも變らんね。唯少しばかり成長つて、苦勞を爲覺えただけが違ふ位のものだらう。私などは最う悉皆變つて容貌も根性も此の三四年は甚く違つて了つて、往昔のやうに暢氣な、お坊様ではないよ。随分すれつからしになつて了つて、何事も面白なくなつて困る

( 165 )







「何が那樣に心配になるのかい？。勿論迎に行くのが至當だつたのだが、斯の通寸暇も無いといふ始末なんだから、つい何んだつたのさ。ねえ、其の位の事は察して與れんければ困るぢやないか。私がついたからは最う何も心配する事も無いぢやないか。家の様子がまた何うしたといふのだ。」

と、何處までも無頓着である。

お今は答に窮つて默然として居た。斯の磯川の一族が、我に對する事の冷淡で而して酷薄なるを思へど、日常其の中に立交つて、まして親たり子たる同胞たる骨肉の親しみあるを、血の異つた他人の、其の間に弾劾の言を挿まば、却つて健三が感情を損ねて、我を仿ない者と

思はぬでも無い。が、我が心を洞察して居る者と云つては健三で、我に同情を表する者と云つても、同然健三であらう。と斯う思つて、お今は到着以來の事情を詳しく語り出した。語つて了つて、

「ですもの心細いものは妾ばかり、貴方からのお手紙があつたものですから母の不承知なのを無理に出掛ては參つたもの、妾は實に思も懸けぬ事ばかりで、何う爲やうかと思つて居ましたの。」

と附加へた。

「其が同然、私を手頼にして來たのに、留守だつたものだからね、非常に落膽して、心細く思ふ矢先だものだつたので左程にも無い事か、深く神経を悩ましたのだらう。心配する事も無いよ。」



(170)

と、事もなげに云はれて、お今は較不<sup>やうふ</sup>満<sup>まん</sup>の思<sup>おもひ</sup>を抱<sup>いだ</sup>きながらも強<sup>た</sup>つて争<sup>あらま</sup>はうとはせず、

「然<sup>さ</sup>う有<sup>あ</sup>り仰<sup>おつ</sup>れば然<sup>さ</sup>うだつたかも知<sup>し</sup>れません。」

と、内<sup>ない</sup>心<sup>しん</sup>の腹<sup>はら</sup>立<sup>た</sup>しさを隠<sup>かく</sup>して了<sup>しま</sup>つた。が、斯<sup>か</sup>くては、六<sup>ねん</sup>年<sup>ねん</sup>の間<sup>あひだ</sup>信<sup>まこと</sup>を繋<sup>つな</sup>ぎし人<sup>ひと</sup>も、我<sup>わ</sup>が真<sup>まこと</sup>の味<sup>あじ</sup>方<sup>かた</sup>では無<sup>な</sup>いやうであつた。

健<sup>けん</sup>三<sup>ざう</sup>は重ねて、

「何<sup>い</sup>れ近<sup>ちか</sup>いうちに、正<sup>せい</sup>當<sup>たう</sup>の順<sup>じゆん</sup>序<sup>じよ</sup>を踏<sup>ふ</sup>んで引<sup>ひ</sup>取<sup>と</sup>るまでは、私<sup>わたし</sup>は餘<sup>あま</sup>り此<sup>こ</sup>方<sup>ちう</sup>へは來<sup>こ</sup>ないからね、其<sup>そ</sup>の目<sup>め</sup>算<sup>ざん</sup>でね、可<sup>い</sup>いかね、母<sup>はは</sup>よりは姉<sup>あね</sup>の方<sup>ほう</sup>がお前<sup>まへ</sup>の話<sup>はなし</sup>對<sup>たい</sup>手<sup>て</sup>にもなるだらうから。加<sup>か</sup>之<sup>に</sup>姉<sup>あね</sup>は隨<sup>ずい</sup>分<sup>ぶん</sup>氣<sup>き</sup>輕<sup>かる</sup>で世<sup>せ</sup>話<sup>わ</sup>好<sup>ずき</sup>ではあるし、萬<sup>ばん</sup>事<sup>じ</sup>お前<sup>まへ</sup>の事<sup>こと</sup>は委<sup>まか</sup>しておくから、可<sup>い</sup>いかね。」

お今は斯<sup>い</sup>の意<sup>い</sup>外<sup>がい</sup>の言<sup>ことば</sup>に、今<sup>いま</sup>まで忍<sup>しの</sup>び忍<sup>しの</sup>んだ我<sup>が</sup>慢<sup>まん</sup>は破<sup>やぶ</sup>れて、わつと泣<sup>な</sup>き俯<sup>ふ</sup>して了<sup>しま</sup>つた。

「おい、何<sup>ど</sup>うしたのだね。」

と、不<sup>ふ</sup>快<sup>かい</sup>げな面<sup>かほ</sup>をして尋<sup>たず</sup>ねる健<sup>けん</sup>三<sup>ざう</sup>が言<sup>ことば</sup>の冷<sup>つめ</sup>たさ。あゝ、健<sup>けん</sup>三<sup>ざう</sup>は昔<sup>むかし</sup>の健<sup>けん</sup>三<sup>ざう</sup>であらうか。お今は健<sup>けん</sup>三<sup>ざう</sup>を見<sup>み</sup>誤<sup>ご</sup>つたのではあるまいか。

## (二十四)

(171)

お今<sup>いま</sup>が爲<sup>ため</sup>に將<sup>せう</sup>來<sup>らい</sup>の運<sup>うん</sup>命<sup>めい</sup>の鍵<sup>かぎ</sup>を握<sup>にぎ</sup>つて居<sup>ゐ</sup>る健<sup>けん</sup>三<sup>ざう</sup>は措<sup>お</sup>いて問<sup>と</sup>はず唯<sup>ゆ</sup>一<sup>いつ</sup>の味<sup>あじ</sup>方<sup>かた</sup>、唯<sup>ゆ</sup>一<sup>いつ</sup>の友<sup>とも</sup>であつた頼<sup>より</sup>四<sup>し</sup>郎<sup>らう</sup>も、此<sup>こ</sup>の二<sup>に</sup>三<sup>さん</sup>日<sup>にち</sup>は何<sup>なに</sup>事<sup>こと</sup>か深<sup>ふか</sup>く物<sup>もの</sup>思<sup>おも</sup>ひに沈<sup>しづ</sup>める様<sup>さま</sup>で、樂<sup>たの</sup>しい同<sup>どう</sup>胞<sup>ぱう</sup>の團<sup>だん</sup>樂<sup>がく</sup>には加<sup>く</sup>はらず、朝<sup>あさ</sup>は夙<sup>と</sup>くより何<sup>ど</sup>處<sup>どこ</sup>へか車<sup>くるま</sup>を



飛し去つて、夜は更深くなるまで歸らなかつた、其の様平常の、輕快で而して樂しげな舉動には似やるべくも無かつた。が、一日の事、頼四郎はお今を訪ねた。お今は幾ど久しく會はなかつた兄弟にでも逢つたやうな心地で、何となく胸が打騒がれた。お今は其の所以を知らぬが、頼四郎の側にある時ばかり、心は得云はれぬ悦愉に浴するを覺えた。

「何うなさいましたの、三四日お目に懸りませんでございましたね。」

「然うですな。」

「貴方は又、些とも家にはお在有なさいませぬのね。大層お忙しい御様子でございますが、何んですか、いよく遠い土地へお在有なの。」

「ですか。」

「否、未だ然うと定つたのでは無いです。家にばかり閉籠つて居るですが、最う貴女には兄が附いて居りますから、お淋しい事も無いかと思つたのですから、其でつい無沙汰致しました。が、一向其の後の様子を知りませんが、御結婚は何時になつたのですな。」

「さ、其の事でございます、最うやがて一週間にもなるのでございませう、健三様からも國子様からも、些とも何んとも有仰つては下さいませぬ、何うしたのでございませうか、また何かお差支でも出来たのでございませうか。」



と云も訖らぬに、お今は、ほろ／＼と涙を零した。

頼四郎は深く心を動かされて、  
「今日になつて何も差支のあつた理ぢやないですが、或は。」  
と云さして口を噤んだ。

其の面をお今は、もじ／＼と眺めて、

「或はと有仰いますのは？……、仕様事なのでございませう妾はもう皆様には他人待遇にされて居りますのでございませうから、御容子を伺はうと存じましても伺ふ譯には参りませず、切めて貴方は……能く妾の事を御心配下さいませうから、斯う申しては何んでございませうが、妾は仕様に心丈夫に思つてるか知れませぬ、何うぞ！差支が

ございませぬのなら、御存知の事をお聞かせ下さいまし。」  
と、訴ふるが如く、怨むが如く。

頼四郎は微笑みながら、

「何有、其は何んですよ、僕の口が辻つたのでございませぬ、甚様都合になつて居るか、僕些とも知らんですよ。實際です、併し何れにしても……、ですな。兄が歸つて来た以上といふものは、御心配なさらんが可いですが、大丈夫です。」

「でも健三様は、何が大層妾に秘して在有つしやるやうでございませぬから、妾は眞箇に……眞箇に心配でなりませんの女といふものは氣の狭いものですから、種々な事を考へてつい、邪推も致しますの。」



「否、僕が憂慮ひますのも其處なのですよ、兎角世の中は行違の多いものであるですから、双方で何か腹中に啣んで居つては、感情を打明けないうで居ますと、とんだ間違が起きるですね、何うか那樣事だけは無いやうにしたいと思つて居るのですよ。」

「では同然健三様が何かお秘しなすつて在有つしやるのでございませう。もしや妾の外に餘儀無い干渉でも……ねえ、お在んなさるのでございませう。」

「那樣事もありますまい。」

「でなければ。」

「其處ですよ。人といふものは他人の氣の附かぬ考へを有つて居るも

のですから。」

「では健三様は、妾に愛想をお盡しなすつたのでは。」

「否、然うお取んなすつては困る？、愛想が盡きたといふのでは無いでせうが。」

「では其様譯なのでございませう。」

と、お今は頻に氣を揉み語す。

「さ。」

とばかり頼四郎は、事ありげに熟と考出して、

「世の中といふものは蒼蠅いものですな。」

「其は然うでございませうとも、妾も此度上京して斯様つまらない苦勞



( 178 )

「しやうとは。思ひませんでした。」  
と、不服がましく云ふ。

「御道理です。」

「真箇に健三様も無情ですわ。」

「さ、其の底には何か事情が絡つて居るですよ。一口に云とば兄は迷つて居るですな。」

「え？迷つて？」

「然うです。」

「迷つてとは、甚様事なのでございませう。同然妾が可厭になつたのでございませう。」

「然うで無いと云ふ事だけは、僕が保証します。」

其の時突然、襖がさつと啓いて、兩人の話を遮つたのは健三であつた。頼四郎もお今も極り悪げに身を縮めて、氣後がしたのか、頓に口を開き兼ねて居た。健三は冷な眼光で兩人を見交して、傲然として兩人の間に、どつかと座つた。

## ( 二十五 )

三人は較暫時俯き勝に、一座は白け亘つて見えた。

健三は口を切つて、「四五日は非常に忙しかつたので、つい無沙汰をしました。で、何うしたね、何か二人で、大分濡やかなお話が始ま

( 179 )



つて居るやうだが。」

と、迭に面と面とを見較べて居る。今は何んもなく氣恥かしいやうな思がせられたのか、面を背むけて居た、頼四郎は調子好く、

「僕もね、久しくお今様に逢はんかつたからね、今日は久しぶりで見舞つたところだつたんだ。」

と、辯解めかしく云出した。

何故か、健三の眼のうちには冷笑の色を帯びて居た。

お今も漸う口を開いて、

「大層お忙しくつて居有つしやいましたんですつてね。其から頼四郎様には着きましたから以來、大變お世話になりましたから何うか、

貴方から宜しくお禮を有仰つて下さいました。頼四郎様でもお居有なさいません、妾の眞箇に、仕様に心細うございましたらう。」

「ふむ、那様に何か弟に心配をかけたのか。」

頼四郎は被蔽せるやうに、

「何有！、僞だよ、兄さん、一緒に居たもんだから、そりや僕も……

何さ。つい朝晩口を利くと云つた譯だつたのさ世話なんて那様氣の利いた眞似はしやせんよ。那様譯ぢやないよ。むい。」

と、渠は少なからず慌忙して居た。

健三は空嘯いて、鬚を弄りながら、妙に落着き拂つて、

「何れ世話にもなつたらうさ。ふ、ッ、既に磯川の家族となつたから



は、そりやお互に親しくもせんければならんのだから、別に不思議は無いばかりか、まづ大いに祝せんければならぬのだらうよ。な。」

と、お今の面を瞥と噴める。

頼四郎は其の時度を超つて、室を去らうとして居たので、

「まあ、可いではございませんか。兄様がお怖いんでございますの。」

「私が来たからと謂つて、何も那様に急ぐ事は無いぢやないか。おい頼ッ。」

「邪魔だらうからね。僕が居ては邪魔をして居るやうなもの。」

と、苦笑に紛らして、頼四郎は室を出て行つて了つた。

お今は其の後を目送つて、

「誠に優しい好い方でございますね。そして大層お仲が好くつて在有つしやるといふぢやありませんか。」

健三は冷に、

「然うさ、何方かといふとまあ、仲の好い方なんだらう、彼でもなか／＼、亂暴な性質なんだがね、不思議にまた優しい事もあつてね、私と違つて愛嬌があるのさ。」

「何處か遠い處へ行つしやるんだとか謂つてお在有でございましたが何んだつて那樣處ろへ行つしまるんでございます。」

「何んだ？、那樣事まで話したのかい。秘密にして居るのだといふに自分で喋舌つて歩く馬鹿もないものだ、其が家の方では父親が不服



をとなへて、阿母も大に賛成しないし、近々のうちに妻君でも貰つて、世帯を持たすと謂つて居るのだから、果して行けるか、行けないのか、さ、疑問なのさ！。

「何かまあ、行つしやらないやうになりますと可ようござんすがね。」「然うさ。」

「だつて長い航路、船で行つしやるんだから、危なうござんすわ。」

「大層弟の事を氣にするぢやないか。」

と、健三は微笑んだ。

「否、然うぢやございませんけど。」

と、お今は狼狽して、

「精格お眠近になつたのでござんすから、遠方へ行つしやるといふと、何んだか淋しいやうな氣が致しますわ。」

「道理さね。」

と健三は感心したらしく。

「だつて然うぢやございませんか。」

と、調子に乗る。

「で私ならば何うだえ。」

斯の意外の間にか今は呆れて、

「何んですつて。」

健三は冷笑つて、



「同然心配かね……、また平氣かえ、念の爲鳥渡聞いとかうぢやないか。」

呆れて居たお今は、急に昂然として、

「知りません！、はい、澤山お愚弄なさいまし。」

「慍らんでも可いよ。……、私も氣懸だからね、其で、つい聞いて見たのさ。」

「氣懸とは……、什麼氣懸なのでございませう。」

「さ、什麼のかね、私にも解らんのだがね、お前知つてお在有ないか」

「人を馬鹿にして在有つしやるッ！」

「何う致して、馬鹿にするどころか、實際！」

「實際？」と、問反すと、

「本氣なんさ！」

と、健三は屹と容を改めた。

## ( 二十六 )

其から三日ばかり経つてからである。春は断りも無く、何處へか行つて了つて、花は掃き集められた掃溜に名残を留めるばかり、野も山も急に翠滴るばかりになつた。昨日今日、青葉を眺めんどの風流でもあるまいが、一日健三は東京へ見物にとお今を誘つた。思も懸けぬ事とは思ひながら、お今は修飾もそこ〜くに、臆て打連立つて、王子の



三橋の家を立出た、此は六年目に面を合してより以來、健三が優しい仕打の嚙矢であつた。

兩人が上野に着いたのは、午後の三時頃でもあつたらうか。花は黄土に委して、青葉若葉に較徴暗き萬目の光景を眺めてお今は健三の説明に耳を傾けながら、漫々と歩を進めたが。耳に入る健三の聲、其の情何うやら六年以前に、町の裏田圃を趙遙した時程に美はしく聞かれなかつた、其の底の方には偽が籠つて居るやうに思はれて。水彩畫展覽會を通覽して、東照宮の石燈籠の間を抜けて、石段を下つて、不忍池の畔へ出た時には、お今は足弱の痛く疲れた体が見えた、池の中の辨天に參詣して、舊馬場の境を漫歩く時であつた。

健三は憶出したやうに、

「時に結婚は何時にしやうね。」

「御都合次第になさいました。ですけども可成お疾く……ね妾も、待遠ですわ。」

と、お今は面を赧くして居る。

「何方にしろ決つてるんだから、急ぐにも及ぶまい。是から少し商用の爲、旅行するかも知れないから、其の後の事にする方が可かないか。」

「ちや又何處へか行つしやいますの。」

「むー。行くよ。」



「大層お忙しいんですね。」

「然うさ、弟と違つてね、私は實に忙殺されて了ひさうなんだ。」

「左様でございますね——。」

と、悄然て了ふと、健三は底意ありげに、

「加之弟もまだ急に旅立はしまいから、王子に居たからと謂つても寂しくはないだらう。」

「でも頼四郎様も御迷惑でございませうし、國子様も甚麽にかお懊惱くつて在有つしやるだらうと存じますと、實に……。」

「實に？……、が何うしたね。」

「何んですの、氣苦勞でなりません。」

「つまらん事を謂つたもんだ、何が氣苦勞かね、はゞツ。でも何んだと謂ふぢやないか、弟とは大層氣が合つてるといふぢやないか、而してお前も大變氣に入つて居るのだから姑や舅の側へ來る前に十分氣樂に遊んで置くが可いのだ。其から何んだ、萬更書生でも無いのだから、式丈は正當にね、立派に爲たいと思ふから、双方の支度にも時日が費えるだらうし、彼此一月位は何麼にしてもかゝるだらう。」

「まあ、一月でございますつて。」

「然う！、一月。不服かえ。」

「いゝえ、不服ぢやございませませんが、餘りお客様ぶつて御厄介になつ



て居るのも何んでございますから。」

と溜息吐く。少時黙つて居て、はつと、憶出したやうに、

「貴方、貴方。」

と、急しく呼立てる。

「何んだ？」

「頼四郎様と氣が合つてるの何のつて、貴方は變なことを酷く有仰い  
ますが、何んの譯でございます。」

「だがね、家には内々那麼相談があるんだよ。」

「那麼相談ツて什麼相談でございますの。」

「其はね。」

と、有繫に謂惱んで居て、

「お前と弟と、夫婦にしやうといふ事よ。」

「えッ。」

と、仰天して、お今は、ばつたり立停つた。

「さ、萬一、那麼相談があつたら何うするね。」

( 二十七 )

「知りません。」

と、お今は叱るやうな口吻であつた。

「知らんかね、は。」